

●数え方のふしぎ① お母さんに教えてあげよう

**数え方のふしぎ ① お母さんに教えてあげよう**

箸は1膳 (はし いちぜん) 鱈子は1腹 (たらこ ひとはら) 又又六は勝負 (すごろく しょうぶ) 一調 → 進む一目 (いちちょう) 数は(ひとめ)

① ひとつまみ (親ゆび 大さじ, 人さしゆび, 中ゆび) ③ ひとたらし (大さじ 5mlぐらい)

② ひとにぎり (人さしゆび ↓ 小ゆび) ④ 塩1ふり (塩 40~50g) 1~2回ふる

ジュース入り1本 (ジュース入り1本) 空かん1個 (空かん1個)

相撲(すもう)は 勝負一番 (しょうぶいちばん) → 枝(えだ)は一手(いって)

ボトルはつめると一本

●数え方のふしぎ② 知っているようで知らない数え方

寺 = 一寺 (いっさい) 神社 = 一社 (いっしゃ) ・ 絵馬 = 一本

**数え方のふしぎ ② 知っているようで知らない数え方**

くだもの (一菓) (いっか) 料理全体で (一皿) (いっざん) 一つ一つの料理は (一品) (いっぴん)

お年玉 (一封) (いっふう) ネクタイ (一掛け) (いっかけ) まんじゅう (一団) (いっだん) 品 (一品) (いっぴん)

カステラ (一釜) (いっかま) ようかん (一棹) (いっさう) つながっている リーゼージ (一連) (いっれん)

切りはなす (一本) (いっほん) 切りはなす (一本) (いっほん)


おふる = 1桶 (ひとかけ)


ストーン (石) (いっせき) (一粒) (いっりゅう) (一丸) (いっがん) (一連) (いっれん) (一本) (いっほん)


●数え方のふしぎ③ 分けていくと数え方が変わる


牛肉・豚肉 = 大きいかたまり | 塊(いっかい) 切り分けると | 切れ


### 数え方のふしぎ ③ 分けていくと数え方が変わる


ホール (一台) 


切り分けると (1ピース) 


パイナップル 切る前は (一本) 


スライスすると (1切れ) 


みかん (一個) 


中のふさ (1房) 

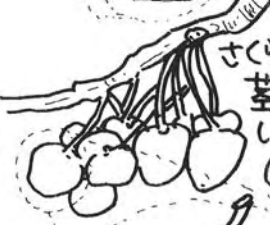
大マグロ 全体で (一本) 


半分で (1丁) 


一口大など (1切れ) 

すいか 切る前は (1玉) 

切り分けると (1切れ) 

さくらんぼ 茎についているとき (1房) 

切りはなすと (1粒) 

キャバツ 全体 

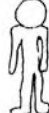
にわとり = まるごと | 羽 → いいところ | 枚 → 手羽 | 本

●数え方のふしぎ④ 数え方が変化するもの


### 数え方のふしぎ ④ 数え方が変化するもの

人間 = 一人 → 一体 → 一口 → 一基 → 一柱


生きて (いると)




死ぬと




骨壺に入ると






墓に入ると







位牌になる







ゴミ袋 中身が空のとき (一枚)  中身が入ると (一袋) 



風船 ふくらませる前は (一枚)  ふくらませると (一個) 



葉書き 書く前は (一枚)  書いた後は (一通) 

カニ そのままだと (一杯)  切り落とされた足は (一肩) 

丼 どんぶり 器としては (一個)  料理を盛ると (一杯) 











ご飯 釜一つ分で (一釜)  茶わん一つ分で (一装い) 

たこ焼き皿にもると (一皿)  舟形にもると (一舟) 

チケット 使う前は (一枚)  使ったあとは (一片) 

うなぎ 1尾 → 1串・そば (ざる) 1枚 かけ 1杯・おしほり 使う前 1本あと

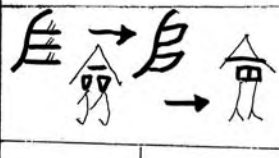
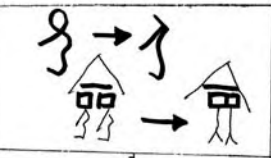
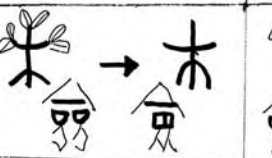

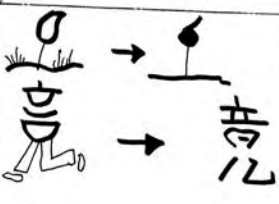
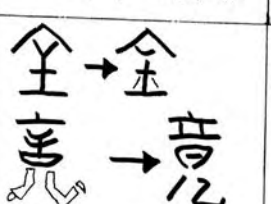
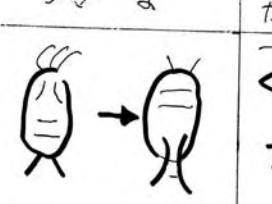
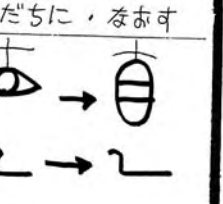
●算数 技あり (おおよその数・音をききわける)

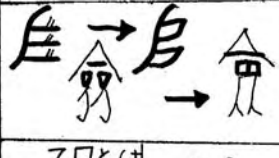

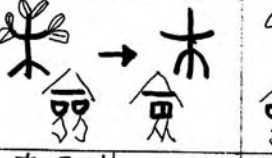

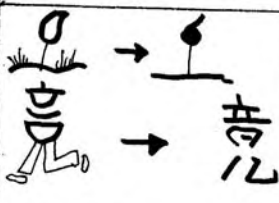

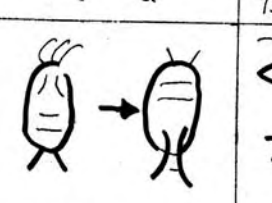
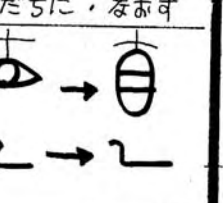
算 数	技 あ り (おおよその数・音をききわける)				
1	2	3	4	5	
<p>100つぶぐらいを 手でつかむ</p>  <p>厚紙の上 100つぶ かぞえる</p>	 <p>10つぶずつ まとめる</p>			 <p>*ティッシュペーパー</p>	
<p>大豆</p>  <p>目をつぶって 「きん」の音か あてる。</p>	<p>あずき</p>  <p>上から</p> <p>*</p>	<p>お米</p>  <p>(金屋)</p>	<p>柿のタネ</p>  <p>25~300個</p>	<p>ゴマ</p> 	

特 記

◎放課後博士(「数字はかせ」「漢字はかせ」「身体はかせ」「地図はかせ」等)の指導方法や使い方は、ホームページ「放課後あそぼ!」で紹介していきます。

●漢字 (検・験・真・儉・境・鏡・直)

検 験		真 儉		境 鏡		険 鏡 直	
ケン・けわしい		ケン		ケン		ケン・ゲン	
							
キョウ・ケイ・さかい		キョウ・カガミ		シン ま		ジキ・チョウ ただちに、なほす	
							

検 験		真 儉		境 鏡		険 鏡 直	
ケン・けわしい		ケン		ケン		ケン ゲン	
							
口とみんが てきま けわしい 険 		人の形集ま る形ロニつ 人かたきさへ みさしめて なまなす 儉 		木の形 ふたりの人の ちがった意 見 検 		馬をあつめ て人がいち いちしらべ る 験 	
キョウ・ケイ・さかい		キョウ・カガミ		シン ま		ジキ・チョウ ただちに、なほす	
							
地面から 目かこめて 地形 土地と土地の 区切り 境 		山に黄金を うまて 形と人の 曲の区切り 鏡 		人の眼の都 分さかさま にまがいた形 をかたぶん てい 真 		十と目の形 あまごう げまわる わるいこと ひきない 直 	

●漢字 (水・池・拾・係・系・捨・地・氷)

水		池		拾		係		系		捨		地		氷	
ケイ・かかり		ケイ		ケイ		ケイ		ケイ		ケイ		ケイ		ケイ	
子・いけ		シ・チ		シ・チ		シ・チ		シ・チ		シ・チ		シ・チ		シ・チ	

水		池		拾		係		系		捨		地		氷	
ケイ・かかり		ケイ		ケイ		ケイ		ケイ		ケイ		ケイ		ケイ	
子・いけ		シ・チ		シ・チ		シ・チ		シ・チ		シ・チ		シ・チ		シ・チ	
人の横向き の形と系束 を指先で より合わせて いる形		係		爪の形 系束の形 手で糸をばさ 持ち上げている		系		手をゆるめ 手をのたもつ 手を放す 休むあすま や		捨		前から見た手 入める印 集まった人々 にいつける		拾	
水たまりに は神さまの ま使い へびがいて いた		池		地 地面から 芽が出た 土の中に へびがいて いた		地		水がこぼ かたくなる ほじめに きる氷目		氷		川の氷が 流れうご ている様子		川	

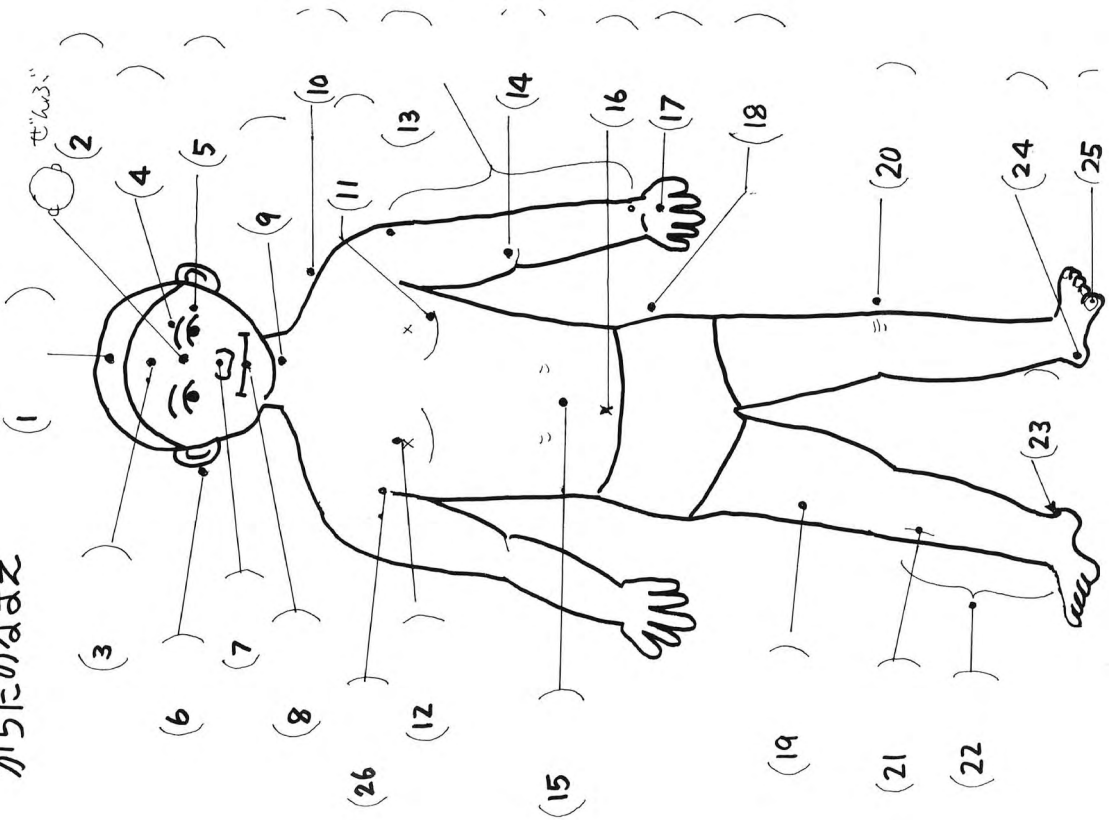
●漢字 (未・飲・貝・第・末・飯・弟・飲)

未 飲 貝 第 末 飯 弟 飲		未 飲 貝 第 末 飯 弟 飲		未 飲 貝 第 末 飯 弟 飲		未 飲 貝 第 末 飯 弟 飲	
ダイ		おとうと・テイ・タイ		グ		か い	
めし・パン		のむ・イン		ミ		すえ・マツ・バツ	

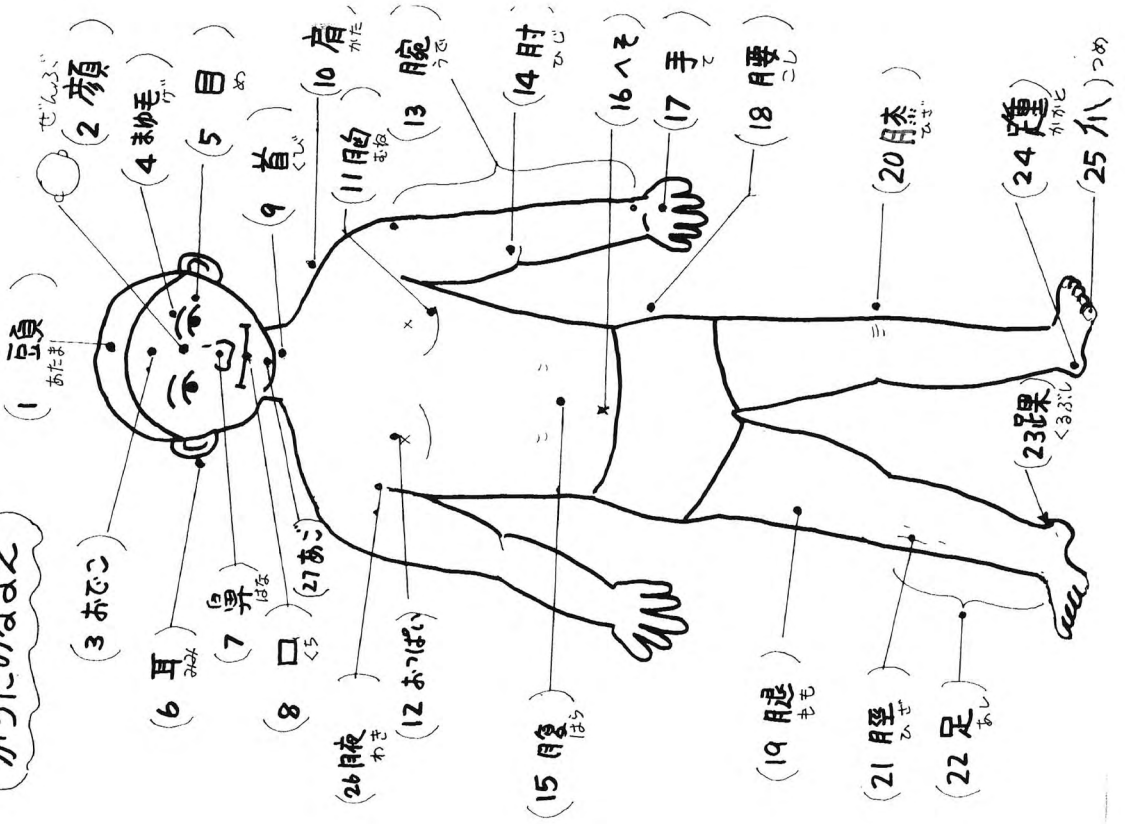
未 飲 貝 第 末 飯 弟 飲		未 飲 貝 第 末 飯 弟 飲		未 飲 貝 第 末 飯 弟 飲		未 飲 貝 第 末 飯 弟 飲	
ダイ		おとうと・テイ・タイ		グ		か い	
めし・パン		のむ・イン		ミ		すえ・マツ・バツ	
つまが巻をき ケの接糸の碎 いみ 順 序の 第		上から下に 生まれて 順々に 弟		目を両手に 持つ もの十分に ある 貝		子安貝の形 かざり 大金 貝	
ものを煮て たべている 手で板を押 してこりか 毎日くりか したる 飯		人が大きな 口をあけて 飲む 飲		木の枝の先 に果実が なっている まる 未		木のこぎえに 矢印をつけ 「ニ」を しめす 末	

●からだのなまえ

からだのなまえ



からだのなまえ



④ 日本国は一道二都二府四十三県

北海道は「カードオー」

東北六県

青森・秋田・山形・福島

関東・甲信越一都九県

茨城・栃木・群馬

千葉・埼玉・東京・神奈川

北陸三県

富山・石川・福井

東海四県

静岡・愛知・岐阜・三重

関西二府四県

京都・大阪・滋賀・兵庫・奈良・和歌山

中国五県

鳥取・島根・岡山・広島・山口

四国は四県

香川・徳島・愛媛・高知

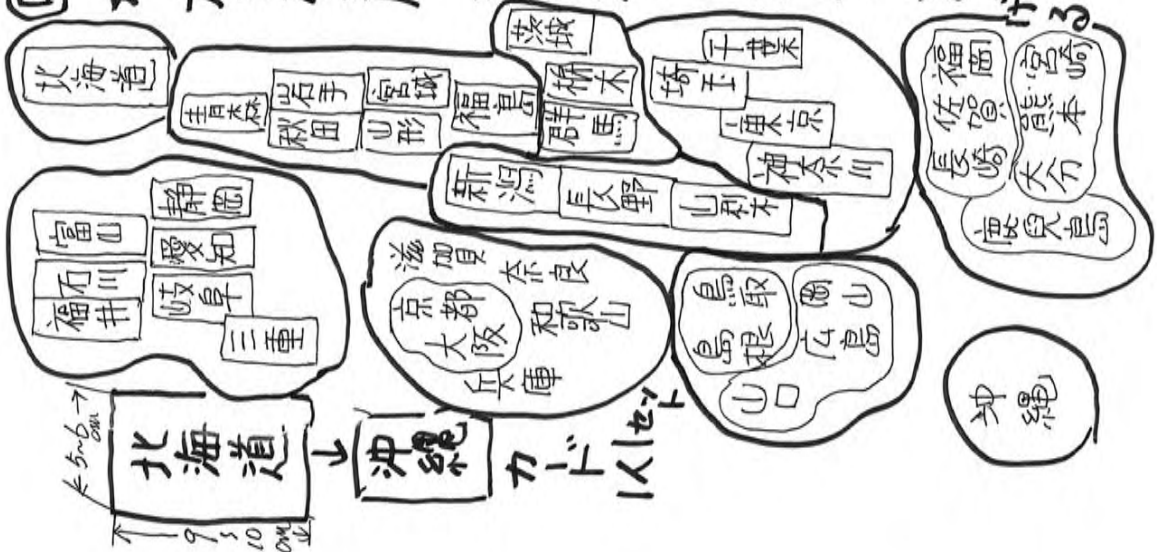
九州七県

福岡・佐賀・熊本・鹿児島

沖縄一県

沖縄

⑤ ★ 大きな声・テンポ・リズムで読み上げ





## 敬老の日 ～季節を身体で表現してみよう～

直井 玲子

### 活動の概要

春夏秋冬に関係する言葉をたくさんみつける。

みんなで身体を使って季節を表現してみる。

### ねらい

子どもたちのよき応援者である祖父母の方々が、放課後の子ども（孫）たちと一緒に遊んだり、たくさん話しをすることで、子どもたちの成長の様子を見ていただき、また放課後活動の場を理解してもらおう。

季節の言葉をたくさん知り、みんなで身体表現をすることの楽しさを感じる。

### ウォーミングアップ

子どもと祖父母全員を4つのグループに分ける。 \*2

グループごとの結束を高めるために、4グループ対抗のゲームを行う。 \*3、\*4

### 展開内容

- ①グループごとに「春・夏・秋・冬」を選択する。
- ②グループで1人書記を決め、それぞれの季節に関する言葉を、制限時間内にできるだけ書き出し、グループ対抗で競う。  
(例 / 春: 入学式、チューリップ、桜、花粉症 etc.)
- ③時間がきたところで、全員で答え合わせをし、どのグループが一番たくさんの言葉が見つけれられたかを競う。
- ④答え合わせの時に、お爺ちゃんたちが言うかもしれない難しい言葉(例 / 「三寒四温」)を、低学年の子どもにもできるだけ理解できるように、わかる人が説明する。\*5
- ⑤出てきた言葉の中からひとつの言葉を選ぶ。 \*6

### フォーメーション

アシスタント役の指導員は、4つのグループに分けた中で、2グループずつサポートを担当とする。ただし、グループ内でまとめ役がいる場合は、できるだけ任せるようにする。

- ・子ども約10～20人、祖父母約10～20人
- ・指導員（リーダー役）1名、  
指導員（アシスタント役）2名

### 環境設定・準備

フラットな空間（全員で円陣を組んで座れるくらいの広さ） \*1

紙と鉛筆、もしくは模造紙とペン（4組ずつ）。

ストップウォッチ、もしくは時計（1つ）。

- ⑥その言葉は他のグループに聞こえないようにし、一枚の写真のようなストップモーションで、その決定的場面を身体全体で表現する。
- ⑦他のグループは、それが何の場面であるかを当てる。
- ⑧それぞれのグループの感想を言い合う。 \*7
- ⑨他のグループの人の意見を取り入れ、またもっと自分たちでも工夫をして、もう一度つくり直しをしてみる。 \*8

### その後の展開

ストップモーションから、動きや台詞を入れて、簡単なお芝居にすることもできる。

### 指導上のポイント

- \*1 子どもたちを活動に集中させるために、できるだけ目の前に、出し物や遊び道具がないことが望ましい。
- \*2 指導員は子どもや大人（祖父母）の組み合わせ、グループ間の会話等の様子をよく観察する。また、指導員（アシスタント）も参加者の一人としてどこかのグループに入り、活動をサポートしていくが、全体の様子を絶えず俯瞰しながら、歩調を合わせていく。
- \*3 指導員（アシスタント）も子どもたちと一緒に本気でゲームに参加する。ここでは、大人が手を抜いたり、子どもたちに勝ちを譲るとあそびがしらけてしまうので、真剣に頑張りましょう！
- \*4 今回は祖父母も一緒なので、走り回る鬼ごっこよりも、主に頭や言葉を使うあそびや、簡単なジェスチャーゲーム等がのぞましい。
- \*5 子どもたちが知らなかった言葉を辞書で調べてみるのもいい。
- \*6 ここでグループごとに季節を交換するのも面白い。
- \*7 感想では「いいところ」を一つと、「もっとこうすると良いと思うところ」を、ひとつずつだせるように声かけをする。
- \*8 友だちの感想を聞いて、もしくは自分たちで気が付いて「もっとこうしよう」がでてきたら、それを実現させるためにも、「つくり直しの時間」は、是非とってもらいたい。

## チャンピオン決定戦！～今日のチャンピオンは誰？～

キッズエクスプレス 21

### 活動の概要

日頃よくあそんでいるゲームで、3～4名の代表者によるチャンピオン決定戦を行うものです。観戦者は、チャンピオンになると思った人の前に並んで応援をします。また、チャンピオンには10ポイント、チャンピオンを当てた観戦者には2ポイントなどと、ポイントを与えて点数表をつけると、チャンピオンを目指す出場者も、応援をしている観戦者も、みんなが一緒に楽しめるゲームとなります。

### 展開内容（あそび方）

#### I. 空き缶積みチャンピオン大会

同じ形の空き缶を制限時間内で、どれだけ高く積むことができたかを競います。

#### II. 紙風船、打ちつづけチャンピオン大会

紙風船を落とさず、壊さず長く打ち続けられた人がチャンピオンになります。

#### III. 風船ふくらまし、割りチャンピオン大会

風船を膨らませて、10回連続で打ち続け、最後にイスにおいてお尻で速く割った人がチャンピオンです。

#### IV. コマまわしチャンピオン大会

同じコマを長くまわし続けた人がチャンピオンです。

#### V. ミイラ 早作りチャンピオン大会

2人1組で、トイレットペーパー1個をミイラ（花嫁？）に見立てた1人に、早くきれいに破らずに巻いたチームがチャンピオンになります。

### 指導上のポイント

- いくつかのゲームをテンポ良くつなげていくことが、盛り上げるコツとなります。
- チャンピオン・ベルト、メダルを用意し、実況放送でおもしろく紹介したりすると盛りあがります。
- 全員が、何かのチャンピオン決定戦に参加するように導きます。

I.



II.



III.



IV.



V.

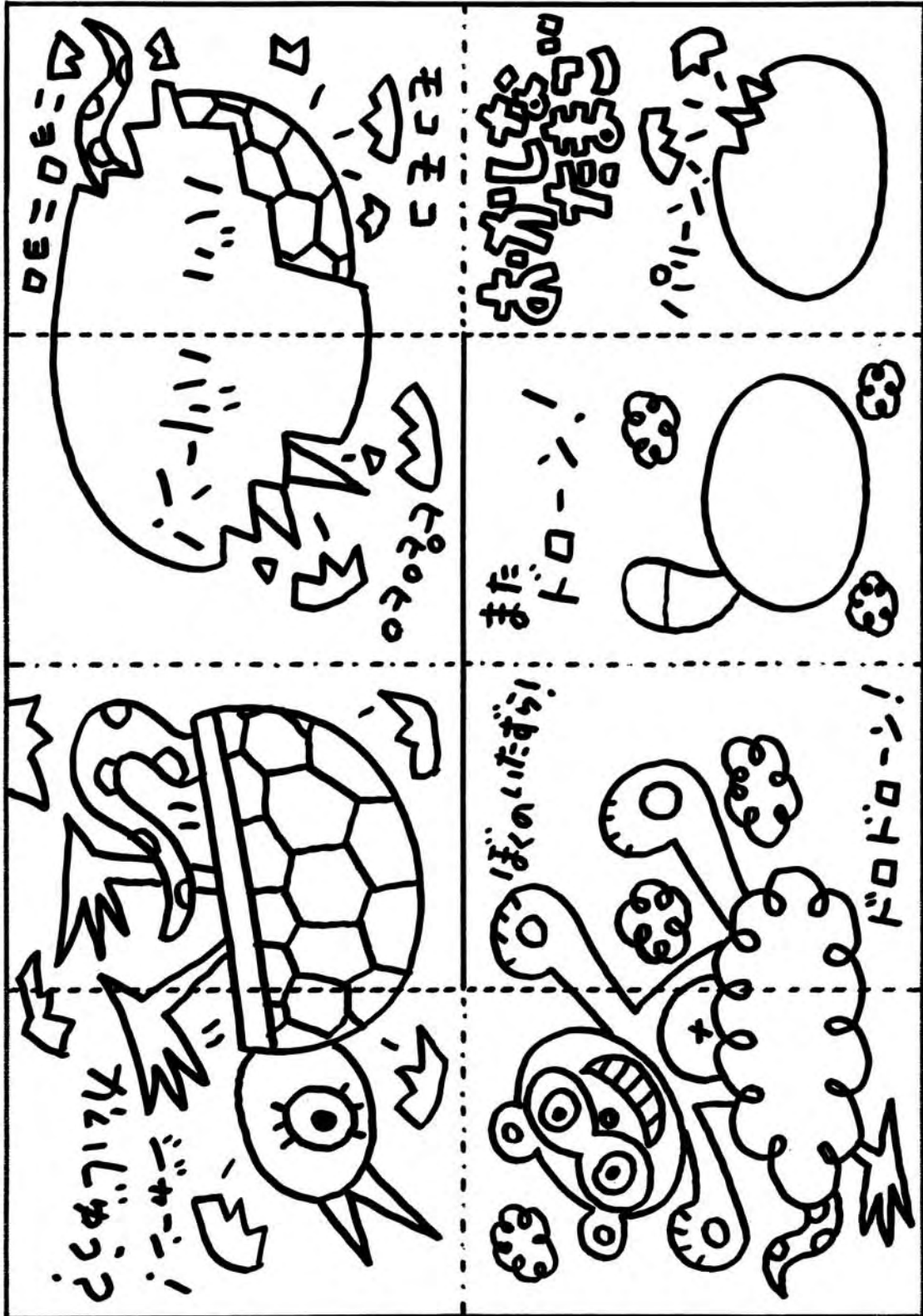


●パタパタ絵本①



—— きりとりせん  
 - - - - やまおりせん  
 ····· たにおりせん

絵本をきりとり、まん中に  
 きりこみを入れておろう。

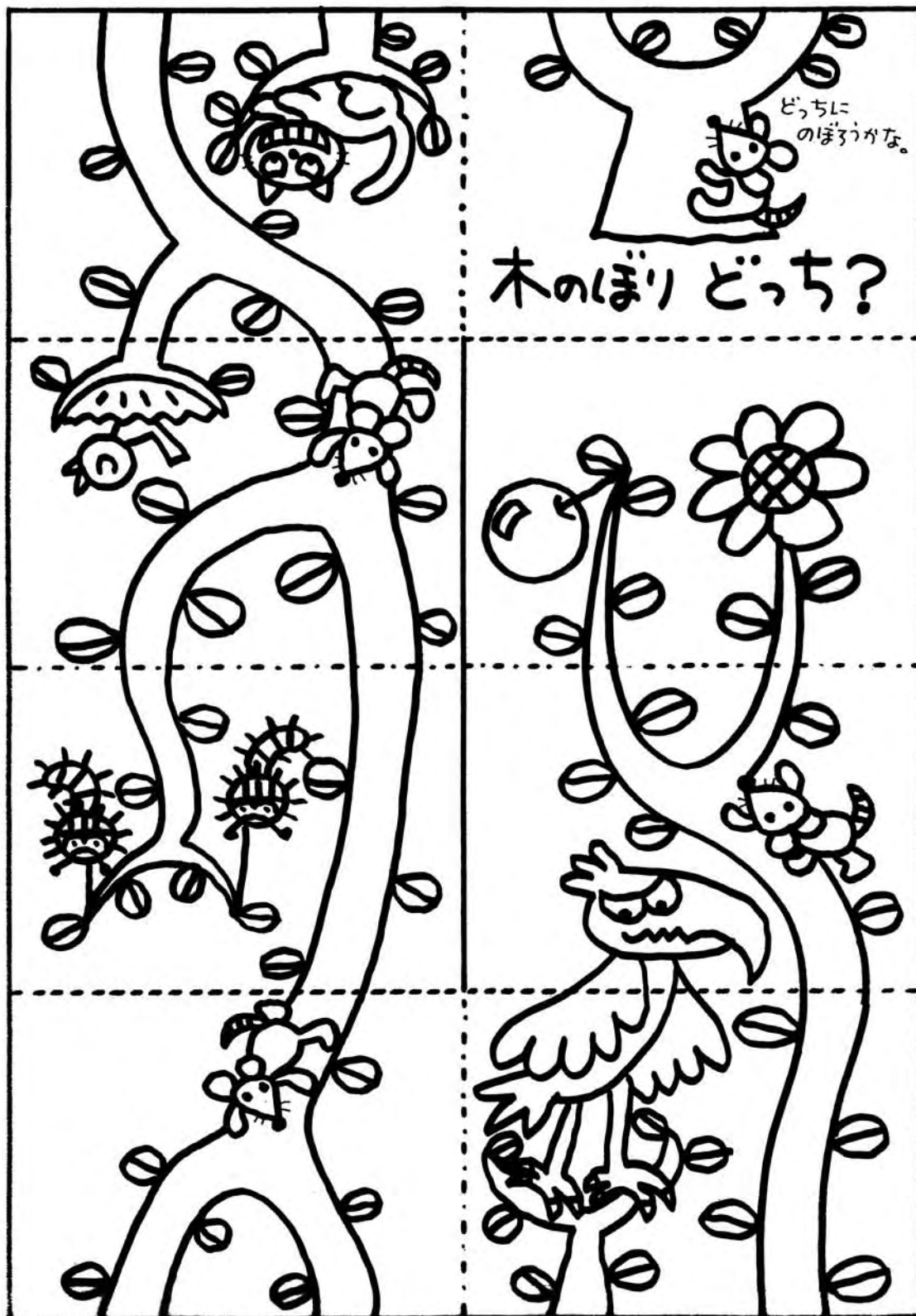


●パタパタ絵本②



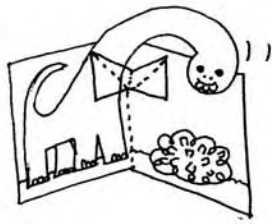
—— きりとりせん  
- - - - やまおりせん  
- - - - たにおりせん

絵本をきりとり、まん中に  
きりこみを入れておろう。

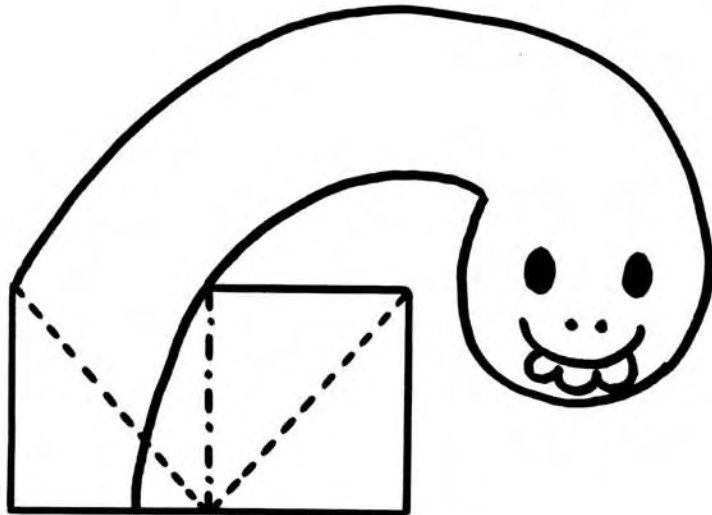


●仕掛け絵本① 草を食べる恐竜

恐竜の頭と絵本をきりとり、  
おりせんをおって数字とあう場所にのりづけしよう。

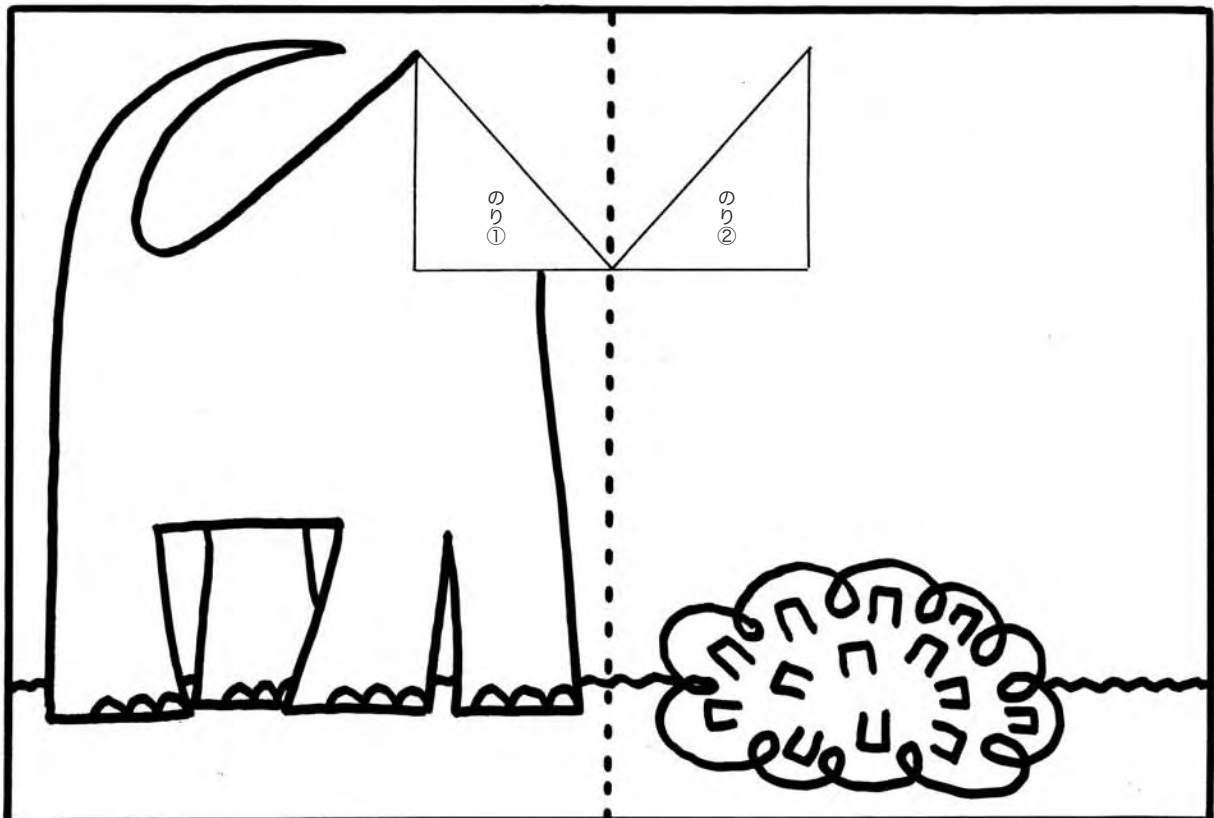


- きりとりせん
- - - - やまおりせん
- ⋯⋯ たにおりせん



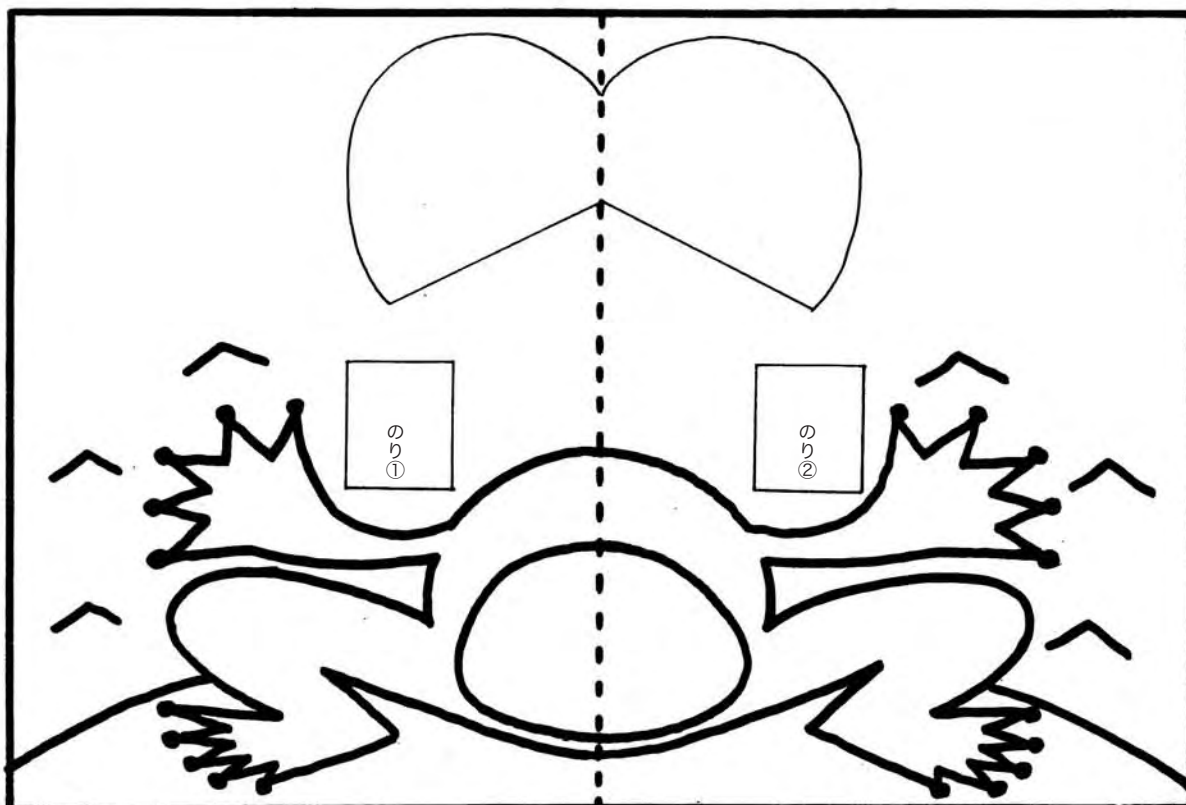
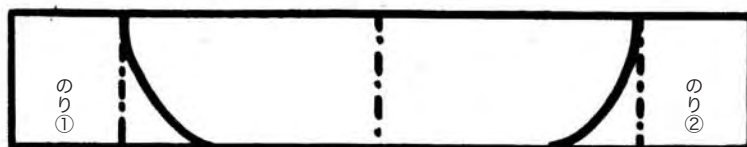
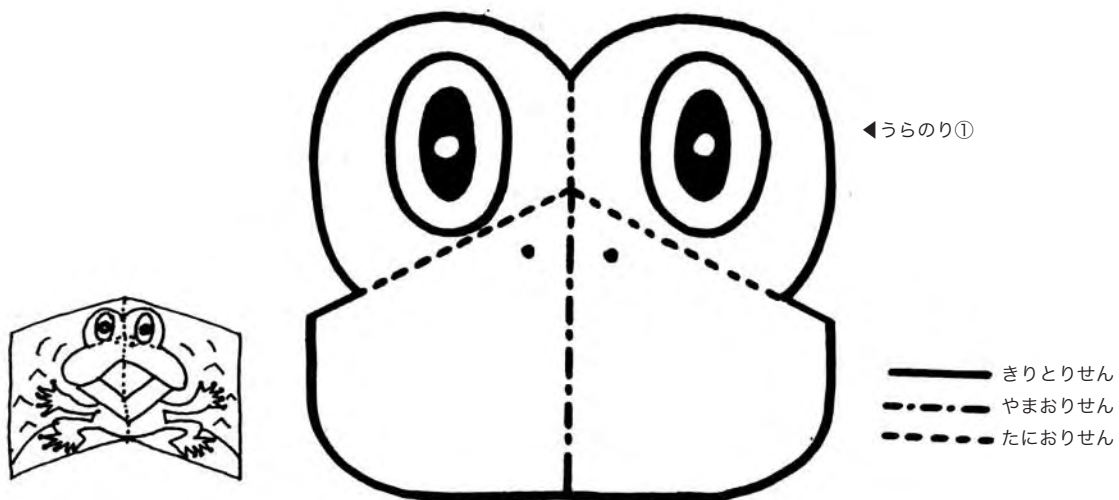
うらのり①▲

▲うらのり②



●仕掛け絵本② うたうカエル

カエルの頭とあご、絵本をきりとり、  
おりせんをおって数字とあう場所にのりづけしよう。



## 指揮人形

柴田 礼子

### 活動の概要

指揮人形（コーンパペット）の動きに合わせて、音を鳴らす

### ねらい

- ・視覚的な助けを借りて、声や音を出すことを楽しむ
- ・媒介物を効果的に使うことで、声や音を出す恥ずかしさを軽減させる
- ・指揮人形の動きに合わせて音を出すことで、フォルテ（強く）、ピアノ（弱く）、クレッシェンド（音をだんだん大きく）、デクレッシェンド（音をだんだん小さく）など、様々な音の出し方を体験する
- ・指揮人形を動かす指揮者の役を交互に体験する

### 展開内容

- ①指揮者になるリーダーを決め、指揮人形を動かす。
  - ②それを見ている人たちは、指揮人形がコーンの中から出てきたら声や音を出し、人形がコーンの中に隠れたら音をやめる。
  - ③リーダーを交代して、同様に遊ぶ。
  - ④声や音の種類、リズムなどを限定して同様に遊ぶ。
  - ⑤音係を数グループに分け、グループの音と全員の音の両方を楽しめるようにする。
- ・最初は、指揮人形の動かし方を指導員の方がデモとして、見せると良い。
  - ・リーダーは、全員がこちらに注目したことを確認して人形を動かす。
  - ・人形の出し入れのスピードを一定にせず、速くしたり、ゆっくりしたりすることで、様々な声や音が出せるようにする。
  - ・人形を動かす役割（指揮者になる役割）を子ども達にも体験させる。

### 対象年齢 / 人数

幼児～大人まで / 少人数～多人数

### 準備物

指揮人形（手作りの指揮人形でも可）、楽器（必要に応じて）

### 環境設定

特になし（着席したままでも実施可能）

### プログラム開発の背景

コーンパペットという人形の見え隠れする性質から、指揮をする人形ということで応用して、誰でもができる指揮遊びのきっかけとしていくことが可能になる。指揮人形を扱うリーダーは、自分の動かした人形の動きによって、音が変化していくことや人に影響を及ぼすことを体験できる。



- ・扱う音は、声、ボディパーカッション、楽器など、種類を問わない。
- ・様々な音媒体で試すと良い。
- ・グループで音を出す場合と、全員で音を出す場合の指揮人形の合図の出し方を工夫する。
- ・指揮人形は、紙コップと割り箸、それにつける絵などで手作りすることも可能。自分の指揮人形を作ることから始めるのも楽しい。(紙コップ指揮人形は、別途、参考図)



# 手拍子回し

柴田 礼子

## 活動の概要

手拍子の一つ回すということを基本に、手拍子の速さを変えたり、進行方向を変えたりする、手拍子をゲーム的に応用した音遊び。

## ねらい

- ・一定のテンポ感を養う
- ・仲間の音を聴く
- ・ルールを自分達で作る楽しさを知る
- ・ボディパーカッションの導入
- ・集中力、即時反応力を養う

## 展開内容

- ①全員で一重の円になって座る。
- ②1人1つの手拍子を叩く。テンポは自由。
- ③それを次の人に順番に回していく。
- ④回すことに慣れたら、反対回りの合図の音（膝を叩く、手拍子を早く2度鳴らすなど）を入れる。
- ⑤その音が来たら、必ず、反対方向に音を回さないといけないルールを適用させて遊ぶ。
- ⑥手拍子の代わりに、小物楽器を使用することも可能。

## 指導のポイント

- ・活動を始める際は、全員が静かになってから始める。
- ・楽器を使用する場合、響きが長い楽器（例えば、トライアングルなど）については、音が完全に聞こえなくなるまで待つことをルールとして設定し、それぞれの楽器の特徴に子どもたちが気づくようにする。

## 対象年齢 / 人数

幼児～大人まで / 少人数～多人数

## 準備物

特になし

## 環境設定

全員が円になれる空間

## プログラム開発の背景

楽器も何もなくても、音遊びができるジャンルとしてボディパーカッションがあるが、その導入でもあり、ゲームでもあり、仲間とのコミュニケーション遊びでもある手拍子回しは、どこでも誰とでもできる楽しい活動である。だが、また反対に失敗することもOKである活動でもあるので、音を出すことに対して試行錯誤をして失敗しても大丈夫であるというメッセージを活動の中に入れていくことが可能。

## 指導上のポイント

- 手拍子のテンポを決めるのは、1番に音を出す人ではなく、2番目に音を出す人になるので、そのことも意識させ、ゆっくりのテンポで始めると良い。もちろん、敢えてテンポアップさせることも可。
- 反対回りを入れると、必ず失敗をする人（大人でも）が出るが、その時の集中力と反射神経で誰でもが間違えることをきちんと伝える。（間違う人がいないとゲームとしてはつまらない）
- 反対回りの合図を出せる回数を何回にするのかなど、ルールを子ども達と決めていくと良い。

## 音のキャッチボール

柴田 礼子

### 活動の概要

声や身体之音、簡単なリズム楽器などの音をキャッチボールをしていくかのように、順番ではなく、ランダムに音を回していく音遊び。

### ねらい

- ・音を人に伝えるということを意識させる
- ・音を届ける場合には、アイコンタクトが不可欠であることを学ぶ
- ・音のゆくえだけでなく、気持ちも相手に向けることが大事であることを理解させる
- ・音が相手に届くような音の出し方を工夫する
- ・音を受け取る側も、ちゃんと受け取るということを意識する

### 展開内容

- ①全員で一重の円になって座る。
- ②最初は手の音でやると良い。慣れてきたら、声や楽器に置き換えていく。
- ③最初に、音を届ける人は、その相手とアイコンタクトが取れてから、手の音なり、楽器の音を届けるようにする。
- ④音を受け取った人は、次の誰かに同様に、音を届けていく。それを繰り返す。

### 対象年齢 / 人数

幼児～大人まで / 少人数～多人数

### 準備物

特になし

### 環境設定

全員が円になれる空間

### プログラム開発の背景

音を人に伝えることは、思いを人に伝えることでもあるが、そのことは、楽器の演奏になってしまうと具現化がむずかしくなることから、もっとシンプルに音を誰かに届けることの意味、おもしろさを味わってもらうために、音のキャッチボールを行う。相手とアイコンタクトを取り、音のゆくえだけでなく、気持ちも届けるということが大切であることも伝えていく。

### 指導上のポイント

- 急いで音を届ける必要はなく、相手を決めてから、相手とコンタクトを取り、確実に届けるということを意識させる。
- 人数が多い中で行うと、誰に届けたのかわからなくなる時があるが、その時も、相手とのアイコンタクトと音の方向性が大事であり、それを何度も試していった良いことを伝える。
- 手の音で慣れたら、声や楽器など、どんどん他の音で試していくと良い。

作ってあそぼ! / つくって飛ばそう

## 紙ヒコーキ

竹井 史

### 活動の概要

わが国の伝統的な折り紙ヒコーキ

### ねらい

折り紙文化と科学との体験

### 準備物

100g/m<sup>2</sup>前後の A4 用紙

### 必要経費

A4 用紙 5～7 円

### 環境設定

風の影響の少ない屋外、体育館など

### 展開内容 (作り方)

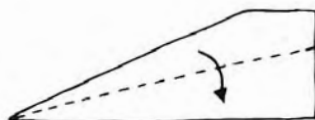
#### ①とんがりヒコーキ



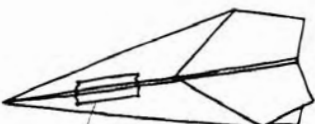
①紙を縦二つに折って開き、左右の角を中心線に沿って折る。

②重ねるように、再度中心線に沿って折る。

③中心線で二つに重ね、図のように翼を左右それぞれ折り返す。



④翼が水平になるように整えて、出来上がり。



**注意** 翼が曲がっていたり、膨らんでいたりすると、うまく飛ばない。

セロハンテープをはると、飛行が安定する。

### 対象年齢 / 人数

特になし

### 環境設定

風の影響の少ない屋外、体育館など

### 指導上のポイント

紙ヒコーキは①折り方②調整③飛ばし方の3点が整って初めて飛行が可能になります。

①折り方では、折り目はきっちり出来るだけ正確に折ること。

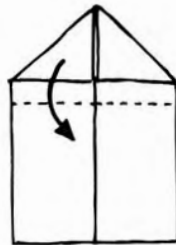
②調整では、飛んでいる状態で、両方の主翼が斜め上を向いている角度に調整(上半角)すること。なお、両翼は同じ角度になるように調整する。

③飛ばし方に関しては、ヘソヒコーキは中央部分を持ち、とんがりヒコーキ、イカヒコーキは前から1/3くらいの部分を持って、なるべく手首を曲げずに、一定の角度で斜め上に思い切って押し出すように飛ばす。

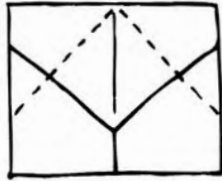
②ヘソヒコーキ



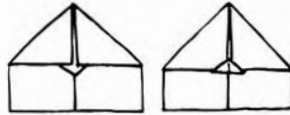
①紙を縦二つに折って開き、左右の角を中心線に沿って折る。



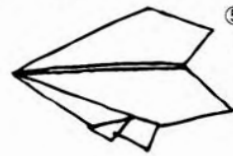
②三角形の部分を、図のように下に折る。



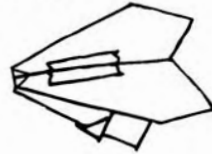
③両方の角を、中心線に向かってもう一度折る。



④飛び出た三角形を上に戻す。

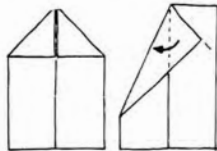
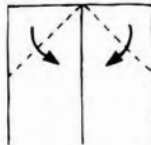


⑤中心線に沿って二つ折りにし、翼の端を中心に重ねるように折り返して出来上がり。



③イカヒコーキ

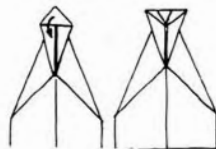
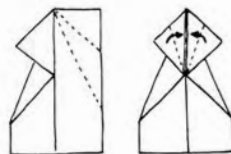
①紙を縦二つに折って開き、左右の角を中心線に沿って折る。



②いったん紙を広げ、それぞれの角を、①でできた反対側の折り目に合わせて折る。

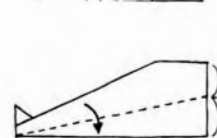
③両方の角を、中心線から外側に折る。

④両方の角を、中心線に向かって再度折る。

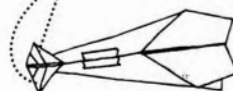


⑤上にできた三角形を、下に折り返す。

⑥中心線に沿って二つに折る。



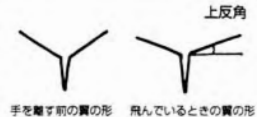
⑦上に反らせる。



⑦翼の端が中心線に重なるように折り返して出来上がり。

**飛ばし方**

紙飛行機の小さな三角形の所を持って、真上を目掛けて飛ばすと、大きな弧を描きながら飛ぶ。



手を離す前の翼の形 飛んでいるときの翼の形

## ストローロケット

竹井 史

### 活動の概要

ストローで出来る簡単な飛ぶおもちゃ

### ねらい

- ・身近な材料を工夫することで出来るおもちゃの面白さに出会う。
- ・空気の圧縮によって飛ぶ科学おもちゃの紹介。

### 準備物

- ・6mm ストロー 1本
- ・4.5mm ストロー 1本
- ・5cm×15cm 厚紙 2～3枚
- ・はさみ、サインペン

### 必要経費

- ・ストロー 2種 2円
- ・厚紙 5円

### 展開内容（作り方）

- ① 6mm のストローを図のように切る
- ② 4.5mm のストローを二つに折り、切ったストローをかぶせる。
- ③ 二つのストローを組み合わせ出来上がり。
- ④ 厚紙で的を作り、的をめがけて吹く。

### 対象年齢 / 人数

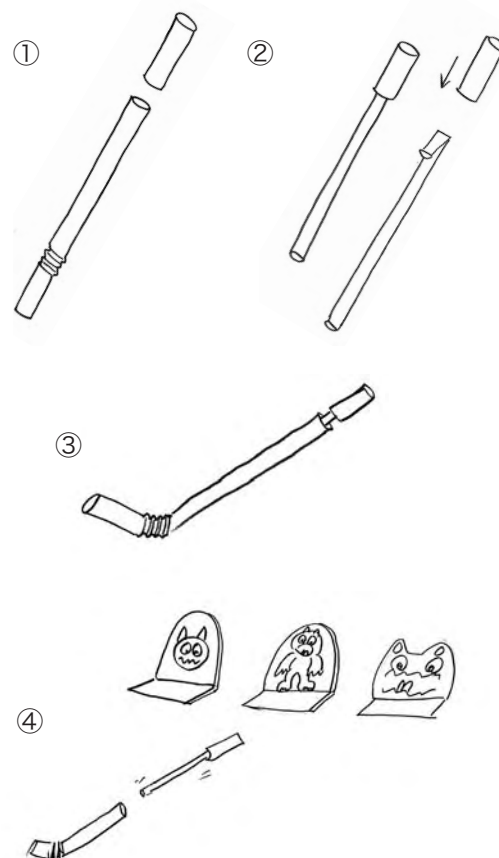
特になし / 低年齢から出来る

### 環境設定

飛ばすおもちゃなので、当たると倒れる的の工夫が必要

### 指導上のポイント

飛ぶおもちゃは、人に当てる遊びに発展し、危険なときもあるので、あらかじめ的を準備して、的に当てるルールのある遊びへと方向付ける。



# ストロー吹き矢

竹井 史

## 活動の概要

ストローで出来る簡単な飛ぶおもちゃ

## ねらい

- ・身近な材料を工夫することで出来るおもちゃの面白さに出会う。
- ・空気の圧縮によって飛ぶ科学おもちゃの紹介。

## 準備物

- ・6mm ストロー 2本
- ・綿棒 2、3本
- ・的 (B4 縦)
- ・はさみ、スタンプインク (2～3色)、セロハンテープ

## 必要経費

- ・ストロー 2本 2円
- ・綿棒 2、3本 2円

## 展開内容 (作り方)

- ① 6mm の 2 本のストローを図のように切って組み合わせた後、セロハンテープで止める。
- ② 2 本のストローを左右に引き、曲がる部分を伸ばす。
- ③ 2 本のストローを S 字に組み合わせ、セロハンテープを巻いて出来上がり。
- ④ 紙で的を作り、綿棒にインクをつけ、的をめがけて吹く。

## 対象年齢 / 人数

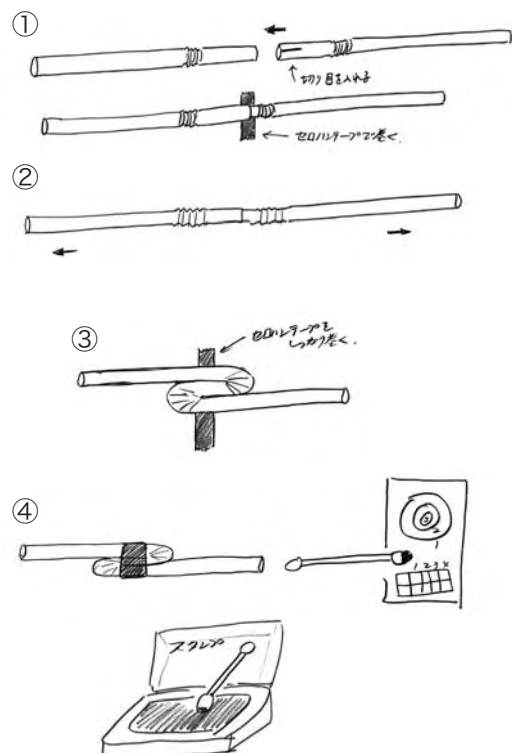
低年齢から出来る / 2～3人

## 環境設定

飛ばすおもちゃなので当たると印が付く的の工夫が必要

## 指導上のポイント

- ・ S 字にするのは綿棒の誤飲の事故を防ぐための環境の配慮。
- ・ 的に適当な数字を書き、下に表を作っておくと、遊んだ後に、誰が一番かどうかを確かめるための数計算 (足し算) へと自然に発展する。
- ・ 的の点数を様々に変化させ、足し算遊びを発展させよう。



作ってあそぼ！／つくって飛ばそう

## 紙トンボ

竹井 史

### 活動の概要

ストローと厚紙で出来る簡単な飛ぶおもちゃ

### ねらい

- ・身近な材料を工夫することで出来るおもちゃの面白さに出会う。
- ・プロペラによる飛ぶ科学おもちゃの紹介。

### 準備物

- ・ストロー (4～5mm)
- ・厚紙
- ・模造紙
- ・サインペン
- ・セロハンテープ

### 必要経費

- ・ストロー 1円
- ・厚紙 2円

### 展開内容 (作り方)

- ①厚紙を 2×15cm に正確に切る (はがきでもよい)。
- ②片方のストローの先を半分に 1.5cm 切る。
- ③ストローの切れ目に半分に折ったストローをさしこみ、セロハンテープで固定する。
- ④プロペラを図のようにねじって模様をかいたら出来上がり。

### 対象年齢 / 人数

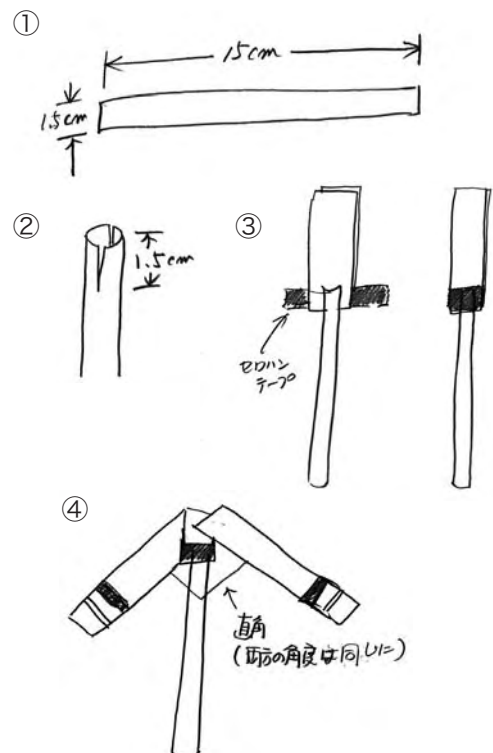
小学校中学年以上 / 何人でも可

### 環境設定

飛ぶおもちゃなので、床に落ちたときに点数を競えあえる着地点を作ろう

### 指導上のポイント

- ・飛ぶおもちゃなので、出来るだけ正確に作る必要がある。特に、羽の角度は左右対称に。
- ・ストローはやわらかい素材なので、ゆっくりまわし、徐々に回転を早くする。
- ・紙トンボが地面に落ちていくときは、まわし方が逆であることに気をつけよう。





作ってあそぼ！ / つくって飛ばそう

## ミニブーメラン

竹井 史

### 活動の概要

厚紙で出来る簡単な飛ぶおもちゃ

### ねらい

- ・身近な材料を工夫することで出来るおもちゃの面白さに出会う。
- ・空気の圧縮によって飛ぶ科学おもちゃの紹介。

### 準備物

- ・厚紙 4cm×4cm
- ・サインペン

### 必要経費

- ・厚紙 1円

### 展開内容（作り方）

- ① 4cm×4cm の厚紙を幅 1cm のカギ型にきる。
- ② サインペンで好きな色にぬって出来上がり。

### 対象年齢 / 人数

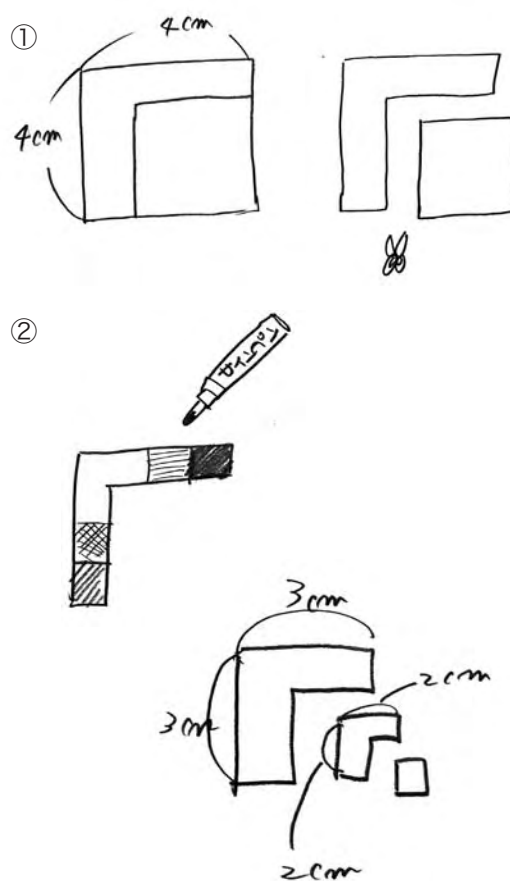
小学校低学年以上 / 何人でも可能

### 環境設定

飛ぶおもちゃなので、床に落ちたときに点数を競いあえる着地点を作ろう

### 指導上のポイント

- ・片手の指先にミニブーメランを置き、斜め上に向ける。もう片方の指でブーメランの端をはじき、回転を与えながら飛ばす。
- ・3cm×3cm の正方形を幅 1cm のかぎ状に切ればミニミニブーメランになる。



# 石であそぼう

田島 美帆

## 活動の概要

身近な自然素材である「石」を拾ってくるところから始まり、五感を使って素材の特徴を捉えた後、素材からイメージを広げた、創作表現活動を体験します。

## ねらい

- ・身近な素材で遊ぶことの面白さを体験する
- ・自然素材ならではの特徴に気づく
- ・石を媒介物として、友達と一緒に遊ぶ
- ・五感を使い、様々なアプローチで石と遊ぶことによって、一つの素材からいろいろな活動が展開できることを知る

## 展開内容（所要時間 90 分）

1. 「3つの石を探そう！」（15分）～素材との出会い STEP.1～  
活動場所に落ちている石で、指導員が指示した石を、制限時間内に、各自一つずつ拾ってきてもらう。
  - ・1つ目は、石にシールの目印がついているもの。
  - ・2つ目は、指導員が提示する石によく似ている石。  
※ 玉砂利のように少し光拓のある石に、シークレットペンで予め印をつけておく。シークレットペンで印がついていることは、子どもたちには教えない
  - ・3つ目は、活動場所に落ちている石で自分が気に入ったもの。
2. 「石と仲良くなるう！」（15分）～素材を知る STEP.2～  
幾つかのグループに分け、グループ内で、それぞれが拾ってきた石を見せ合ったり、自分が気に入って拾ってきた石は、どこが気に入ったのかななどをシェアする。

## 対象年齢 / 人数

小学校1年生～3年生 / 20名～30名

## 環境設定

- ①石探しができるような場所や、石がたくさん落ちている場所が望ましい
- ②屋外での「石探し」は、屋内での「宝探し」にすることも可能
- ③活動場所の近辺で拾える石の他に、活動場所以外で拾ってきた石や、普段あまり手にすることのない火打ち石や鉱石等のめずらしい石を用意し紹介する。また、石に関連する絵本、図鑑なども子どもたちに紹介したい

## 材料

庭先に落ちている石、海岸で拾った石、加工されている石など  
紙袋、シークレットペン（5本程度）、ミニマイクロスコープ、事務用の丸シールマジックペン、はさみ、色画用紙、マスキングテープ、綿、片段ボールなど

## 開発の背景

普段あまり気に留めることなく、また意識して見ることがない「石」をテーマにすることで、身近な素材でいろいろな遊びができること、様々なアプローチによって、ひとつの素材から、創作表現活動へと発展できる可能性を知ることができます。  
また、都会の中にある石、河や海岸に落ちている石等は、明らかに形状や色が違うので、石を通して地域の特性を理解したり、理科に関連付けていくことも可能です。

① 観てみよう!

大きい順、色の濃い順など、いろいろな順番でみんなの石を並べてみる。

② 触ってみよう!

グループの中で、誰か一人が目を閉じて(或いは、目隠し)、みんなの石の中から、どれか一つを触る。目を開けて、自分が触った石を、当てる。

③ 聴いてみよう!

グループの中で、誰か一人が目を閉じて(或いは、目隠し)、他のメンバーが、各自の石を打ちつけて音を鳴らし、どの子の石の音だったのかを当ててもらおう。

**3. 「石と友だち」(5分) ～素材と遊ぶ STEP.2～**

自分の石に目のシールを貼り、名前をつける。

**4. 石の見立て遊び(10分) ～素材と遊ぶ STEP.2～**

①目をつけた石を、色画用紙の上に乗せて、ある場面を作ってみる。

②最初は、講師がある場面のテーマを与え、こどもたちの様子を見ながら、こどもたちからもテーマを挙げてもらう。

例) 石を向かい合わせて「にらめっこ」、石を順番に並べて「遠足」など

**5. 石の旅(35分) ～素材から創る STEP.3～**

①自分の石たちが行ってみたいところ(場所)を、色画用紙の上に描いてみる。

②片段ボール、綿、マスキングテープ、すずらんテープ、毛糸、紙テープなども用意しておき、立体的な作品になるような素材もこどもたちに提示する。

③作り終わったら、自分の作品に「タイトル」をつける。

**6. みんなの石の旅(10分) ～創作品に親しむ STEP.4～**

①それぞれの作品を鑑賞し合う。

②友だちが作ったところへ遊びに行く。

## 指導のポイント

四街道のワークショップは、各々のステップをベースに『プログラミング』したものです。

STEP.1 ⇒ STEP.2 ⇒ STEP.3 ⇒ STEP.4  
「素材と出会う」 「素材を知る」 「素材から創る」 「創作品に親しむ」  
「素材と遊ぶ」 (創作品の発表)

### STEP.1 「素材と出会う」

普段見慣れている素材でも、子どもたちがどのように出会うかによって、その活動に対する興味の持ち方が、ぐっと変わってきます。

### STEP.2 「素材を知る」 「素材と遊ぶ」

ここでは五感を使うこと、様々なアプローチをすることで、子どもたちがより素材を深く知り、こういう遊びはできるかな？といろいろなことを「試す」時間を作ることで、自ら発見することを促します。

### STEP.3 「素材から創る」

STEP.1, 2 で体験したことを、十分に活かしながら、創作活動へと発展させていきます。

### STEP.4 「創作品に親しむ」

それぞれの創作作品（パフォーマンスを含む）を発表し合うことは、互いの表現を認め合うことにもつながります。いろいろな表現の仕方があっても良いのだということを知る大切な時間です。

素材を用いた活動を行う場合は、素材に対する子どもたちの興味を促すこと、素材ならではの特徴を活かすこと、素材と関わることで子どもたちの創造性を引き出すことが重要なポイントです。これらのポイントをうまく網羅し、段階を踏んで無理なく創作活動へと導くひとつの手がかりとして、上記のステップが有効であると思われる。また、このステップを基本にすれば、他の素材に置き換えて活動を考えていくことも可能です。

# 特色ある「放課後活動計画」とは

---

# 特色ある「放課後活動計画」とは

## ～プログラミング手法を上手に活用する～

放課後活動の現場では、一般的に、保育所や幼稚園、子育て支援センター等のように、年間を通した「事業計画」(＝「年間計画」)に基づいて、各月毎に具体的な計画を立てて運営しています。そして、年間を通した放課後活動の「テーマ」をもとに、限られた年間の運営予算の中で、具体的な人の配置、環境の整備、行事等を計画していきます。また、放課後児童の家庭に向けては、月毎に「放課後だより」等を作成し、配布しています。この「放課後だより」を手にして、共働きをする保護者の家庭では、「子どもの居場所(預け先)」を確保し、「ワーク・ライフバランス」を計画立てているようです。

これらの「子どもの居場所づくり」といわれる子育て支援サービスは、ご存知のとおり、学童保育からの施策ですが、昨今の「放課後子どもプラン」においては、全小学校児童(主に小学校1～3年生)を対象とした支援サービスとなっています。その結果、「安全、安心、見守り」の従来からのモットーに加え、新しい役割りとニーズが求められるようになってきています。

下記の表は、『放課後活動支援 i-ku サポートプログラム』の特徴の1つとしています、「プログラミング手法」の展開例です。

### プログラミング手法(展開例)

プログラム名：自然とあそび！「石であそぼう」

		ウォーミングアップ	I. 素材あそび		II. 創作あそび		展開(継続～)	
季節	素材	はじめに	活動(STEP 1)	活動(STEP 2)	活動(STEP 3)	活動(STEP 4)	まとめ ～次へ～	
			素材を知る (出会い→観察)	素材であそぶ	素材から創る	創作作品に親しむ		
年間計画／ バリエーション	春	石	霧囲気づくり	3つの石を探そう	石と仲良くなるよう 石と友だち 石の見立てあそび	石の旅	石の旅の想いで	創作キャンパスの応用 ・模造紙→紙箱
	夏	貝殻	グループ化	〇〇〇〇〇〇〇	〇〇〇〇〇〇〇	〇〇〇〇〇〇〇	〇〇〇〇〇〇〇	創作環境を代える ・まち→海・宇宙
	秋	どんぐり	受動的→能動的	〇〇〇〇〇〇〇	〇〇〇〇〇〇〇	〇〇〇〇〇〇〇	〇〇〇〇〇〇〇	季節の素材を代える ・松ぼっくり
	冬	落ち葉	夢中力	いろいろな 落ち葉を探そう	ひらひら落ち葉 落ち葉でお風呂	落ち葉で 創作絵本づくり	絵本に音を添えて	素材を組み合わせる ・落ち葉+木の実

KID'S EXPRESS21

このプログラミング手法の展開例は、「自然とあそぼ！「石であそぼう」」（本誌 78～80 頁）に掲載しているもので、四街道市におけるワークショップで試行しました。（詳しくは、「活動報告レポート」（本誌 101～103 頁）をご参照下さい）

表の横軸には、1つのテーマをもとにした活動展開のフローを記載しています。今回、ワークショップで試行したプログラミング手法の展開例は、「石」を素材にしたテーマで創られたものです。

まず、ウォーミングアップのプログラムから始まって、「素材あそび」から、「創作あそび」へ、そして最後に、継続して活動するための展開（応用例）を示唆したところまで、約 2 時間の放課後活動の中で実演しました。

一方、表の縦軸には、季節ごとに「素材」を代えたテーマをもとに、バリエーションの展開例を記載しています。

例えば、夏季には「貝殻」、秋季は「どんぐり」、そして、冬季は「落ち葉」をテーマに展開することができます。このような展開は、年間計画をたてる上でとても便利です。ここで紹介しました、自然遊び「自然とあそぼ！「石であそぼう」」のテーマも、年間を通した活動の柱となり、また、放課後活動としてのオリジナリティを打ち出すことができます。

「放課後子どもプラン」においては、全小学校児童（主に小学校 1～3 年生）が対象となっています。その結果、塾的なニーズや、スポーツクラブ的なニーズ等が求められてくるとも考えられます。そのようなニーズに対応するためには、年間を通した特色ある活動が不可欠となります。今後は、今の子どもたちに課せたい社会教育的な視点の「テーマ」をプログラムとして掲げ、放課後活動の柱を持って展開しなくてはならないと思います。





# 放課後活動 プログラム&ワークショップ

## 活動報告レポート

---

- **「レクリエーションスポーツを楽しもう！」(児童／指導員対象)**  
～レクリエーションボッチャボール、ポリバットピンポン、風船バレーボールなど～  
講師: 渡辺 美佐子 場所: 石川県・小松市東部児童センター／小松市公会堂
- **「保存の知恵を伝える」(児童&指導員対象)**  
～くん製作 & おむすび作り～  
講師: 相澤 菜穂子 場所: 石川県・小松市芦城センター
- **「放課後楽校」(児童／指導員対象)**  
～おもしろサイエンス、漢字はかせ、地図はかせ～  
講師: 阿部 進 場所: 京都市山科区・大宅児童館
- **「飛ばすおもちゃを作ろう！」(児童対象)**  
～連凧、ブーメラン、吹き矢作り～  
講師: 竹井 史 場所: 京都市山科区・大宅児童館
- **「缶笛を作ってあそぼう！」(児童対象)**  
講師: 柴田 礼子 場所: 東京都港区・放課 GO→あざぶ (麻布小学校)
- **「石であそぼう！」(児童&指導員対象)**  
講師: 直井 玲子・田島 美帆 場所: 千葉県四街道市・四街道地区コミュニティセンター

指導員対象

## レクリエーションスポーツを楽しもう!

— レクリエーションボッチャボール、ポリバットピンポン、風船バレーボールなど —

講師：渡辺 美佐子 場所：石川県・小松市公会堂

### ワークショップ概要

小さな子どもから高齢者、障がい者まで一緒に楽しめるよう工夫されたレクリエーションスポーツを放課後活動に取り入れ、楽しみ、交流の幅を広げることを目的としました。

開催日時：2008年12月9日（火） 10：00～12：00

場所：石川県・小松市公会堂

指導講師：渡辺 美佐子

参加者：30名（指導員）

### 展開内容

#### 1. 新聞紙であそぼ!

まずは5～6人のグループになります。1枚の新聞紙を途中で切れないようにどれだけ長くできるか、3分間で競争です。一番長くできたのはどのグループかな？

新聞紙の切り方に決まりはありません。各グループで話しあって、どうしたら長くできるかを考えます。



#### 2. 新聞ボッチャ

長さ比べの次は、その新聞紙を使って、ボッチャボールを作ります。新聞紙を丸めて作ったボールはまっすぐ転がりにくいです。狙ったとおりにいかず、みんな大苦戦しました。



#### 3. ボッチャボール

今度は実際にボッチャボールを使います。フープや八角的を狙って、まずはボールの扱いを覚えます。それから、3人ずつでチームを組み、実際にゲームを行ないました。



#### 4. 風船バレーボール&ポリバットピンポン

ふくらますと80cmほどの大きさになる風船を使って、風船バレーボールを行ないます。今回は全員で輪になって、風船を落とさないように打ちあいます。大きな風船はゆっくりと落ちてくるので小さな子どもやお年寄りなど誰でも楽しめます。また、風船の中に鈴を入れれば、目の不自由な方も一緒に楽しむことができます。

最後は机をつなげて、ポリバットピンポンです。ペットボトルに柄をつけて、プラスチックの玉を打ち合います。机から落ちないように周りの人達が壁を作るなどして、みんなで楽しみました。



#### 5. 最後に

今回は新聞紙を使ったポッチャボールなど、工夫次第で手軽にできるものを中心におこないました。また、先生からは実際に遊ぶ時には、参加する子ども達の年齢なども考慮して、ルールを自由に変えて楽しんでほしいとのコメントもいただきました。

児童対象

## レクリエーションスポーツを楽しもう!

— レクリエーションボッチャボール、ポリバットピンポン、風船バレーボールなど —

講師：渡辺 美佐子 場所：石川県・小松市東部児童センター

### ワークショップ概要

小さな子どもから高齢者、障がい者まで一緒に楽しめるよう工夫されたレクリエーションスポーツを放課後活動に取り入れ、楽しみ、交流の幅を広げることを目的としました。

開催日時：2008年12月9日（火） 15：00～17：00

場所：石川県・小松市東部児童センター

指導講師：渡辺 美佐子

参加者：50名 小学生（1～3年生）

### 展開内容

#### 1. 風船バレーボール

午後は実際に子どもたちを相手にワークショップを行ないました。まずは風船バレーボールで準備運動です。ゆっくり落ちてくるボールに触ろうと子どもたちが必死で追いかけます。体がほぐれてきたところで、男の子と女の子に分かれて、ゲームをします。壁の両端にゴールを作り（A3程度の紙を貼る）相手のゴールにボールをぶつければ1点となります。壁や天井に当たったボールはどこに跳ね返るのかわからず、なかなか点数が入りません。



#### 2. 新聞ボッチャ

子どもたちに新聞紙を2枚渡して、ボッチャボールを作ります。上手に作らないと丸いボールは作れません。小さな子どもは先生やお兄ちゃん、お姉ちゃんに手伝ってもらいMyボールの完成させました。

ゲームに入るに前にまずはボールを使って軽く準備運動。2人で向かい合って座り、足でボールの受け渡しをおこなうなどしました。足での受け渡しは意外に難しく、ボールを何度も落



としていました。

次に男の子と女の子のチームに分かれて、ポッチャゲームです。今回は床にフープを置いてゴールにします。いっせいに投げたボールが何個ゴールに入るかな？手作りボールの転がり方に、みんな一喜一憂しました。



### 3. ポリバットピンポン

卓球台を使って、ポリバットピンポンを行ないます。激しい打ち合いから、ボールが相手を飛び越えて遠くに飛んでいってしまったりと大騒ぎでした。

### 4. 最後に

午後は子どもたちを相手にワークショップを行ないました。はじめに大きな風船が出てきたところで、早くも子どもたちは大興奮です。こういうときはケガのないように指導員がうまく遊び方を工夫して、子どもたちを誘導することも大事です。新聞紙を使ったボール作りでは、思ったように転がらず何度作り直す子どもたちがいました。子どもたちが思っていた以上に自分たちで遊びを工夫する姿がとても印象的でした。

児童 & 指導員 対象

## 保存の知恵を伝える

講師：相澤 菜穂子 場所：石川県・小松市芦城センター

### ワークショップ概要

食品の保存はたくさん獲れた物をいかにして長持ちさせて食べるか、という考えからさまざまな工夫と技術が生み出され発達しました。現代においては冷凍・冷蔵技術が発達したお陰で、旬の野菜や魚介類などの生鮮食品は鮮度を保ったまま保存できるようになりましたが、便利になった反面、昔の人々が築きあげてきた保存の知恵からできた高野豆腐、切干大根、棒だら、いぶりがっこなどの乾物、干物や燻製が食卓から遠ざかっています。

これらは日本食の食文化を影から支えてきたものです。

今回の教室では、昔ながらの保存の知恵と食べ物の性質について楽しく実践しながら理解します。

開催日時：2009年1月24日（土曜日）10:00～12:00

場所：石川県・小松市芦城センター

指導講師：相澤 菜穂子（地域アドバイザー／狭間 信一「旬菜焼はざま」金沢市）

参加者：30名 小学生（1～3年生）、指導員

### 展開内容

#### 1. 手洗いについて

「学校から帰ってきた時や料理をする前にまず手をきれい洗いますが、どうしてかな？」

子供達からバイ菌がいるからなど、答えがすぐ出てくる。

手には見えない菌がいることを説明し、手の洗い方をデモンストレーションして、料理の前に各自でもう一度手を洗うことを確認する。

#### 2. ごはんを炊く

「今日はおむすびを作ります。まずお米がごはんになる様子を見てみよう。」

お米を研いで、水につけておくと、半透明の色から白色に変わることを見る。

火のつけ方を確認する。

ガスコンロにガラス製の鍋をのせて炊飯し、その変化の様子を見る。



### 3. 保存の知恵（くんせい）

「昔は冷凍冷蔵庫がなかったけど、それに入れなくてどうやって食べ物を長持ちさせていたと思う？」

煙による保存の知恵について説明する

3種類のスモークウッド（ぶな、くるみ、さくら）を見せて、火のつけ方、くんせい作りの行い方を見せてから、グループごとに分かれて各台で行う。



### 4. 保存の知恵（塩の脱水作用と漬物）

漬物の原理となる、塩の脱水作用をきゅうりを使って行う。

子供達はグループに分かれ、各自に短く切ったきゅうりを配り、スプーンで上をくり抜いて、塩をかける。

「さて、きゅうりはどうなるかな？」

答えは1時間後に分かります。



### 5. 色の変化で食べ物の性質を知る

刻んだ紫キャベツを配り、水と共に鍋に入れて、火にかける。

「どんな色になると思う？」と聞きながら、白滝、酢を入れて色の変化を観察する。

予想をしない変化に子供達は大喜び。



### 6. かつお節削り体験

かつお節は何からできて、どういう風に作られるか、かつお模型教材を使って説明する。かつお節もくんせいのできる食べ物。

かつお節削り器を2台用意して、交替で削り、出来たのかつお節を試食する。



### 7. おむすび作り

おむすびの作り方を実演する。

子供達は作る前にもう一度手を洗って、素手でおむすびを作る。

お茶碗にごはんを入れて子供に配り、鮭や梅の具材を入れ、海苔をつける。

いろいろな形や大きさになって、たのしい歓声上がる。



### 8. 即席のみそ汁を作る

お碗に味噌を入れて少しのお湯で溶く。かつお節、とろろ昆布を入れて、湯をそそぎ、刻んだねぎを入れる。

### 9. いただきまーす

「いただきまーす！」のあいさつで、昼ごはんとなりました。

<タイムテーブル>

<進行内容>

<器具>

<p>下準備</p>	<p>デモンストレーション用の米を研いで浸漬する。おむすび用の米を研いで炊飯準備、燻製食品のカットとグループに分ける、きゅうりの4等分にカット、紫キャベツのカット、お吸い物のねぎのカット、おむすびの具材の準備</p>	
<p>前日</p>	<p>調理器具のセット、材料分け</p>	
<p>調味料</p>	<p>塩、味噌、酢</p>	
<p>食育テーマ</p>	<p>保存の知恵</p>	
<p>班分け</p>		
<p>10:00</p>	<p>挨拶 今日行うことの説明 手洗いの仕方(ばい菌の説明)</p>	
<p>10:10 <b>ご飯の炊き方</b> (耐熱ガラスの鍋使用) 米 …… 2カップ 水 …… 2と 1/3カップ</p>	<p>米を研ぐ(デモンストレーション) 水につけたものを用意し、どのくらい白くなっているか見る。 (炊飯スタート) 強火→沸騰したら弱火→12分後 再び強火 15秒 →火をけて蒸らす15分</p>	<p>耐熱ガラスの鍋 1 ボール ザル</p>
<p>10:20 <b>くん製作り</b> チーズ ちくわ ししゃも いかの一夜干し</p>	<p>昔の保存の知恵について説明 3種類のスモークウッドを使用(ぶな、桜、くるみ) スモークウッドに火をつける→弱火でくん製の開始→途中でひっくりかえしながら 20 ~30分燻煙する</p>	<p>中華鍋 アルミホイル 金網、ステンレスボール 軍手、トング スモークウッド(着火マン)</p>
<p>10:40 <b>食育実験</b> ①塩の働き(脱水作用) 塩 きゅうり</p>	<p>保存食の漬物を作る秘密 野菜の中をくりぬいて、塩を入れる → 1時間後見る 水で洗って、漬物で食べる  <b>鍋に水を入れて湯を沸かす(各台)</b></p>	<p>スプーン お皿</p>
<p>10:50 <b>②酸とアルカリの実験</b> 紫キャベツ しらたき 酢</p>	<p>色の変化で食べものの性質を見る面白い実験 千切りにした紫キャベツをお湯でゆで、ゆで汁をこす。 鍋に汁を入れて、白滝を入れる 白滝の色が青に変わる。煮汁も青になる ゆでた白滝をざるに入れて、酢をかける(ピンクになる)</p>	<p>鍋、ざる、ボール 菜はし</p>
<p>11:10 <b>かつおぶし削り体験</b>  <b>おむすび作り一人2個</b> ごはん …… 5人で4合の割合 海苔 …… 一人1枚 塩 鮭、梅—好きな具を選ぶ</p>	<p><b>ごはんの炊飯開始</b> かつお節についての説明(かつお模型教材使用) 削り方を実演したら、子どもたちが行う前にもう一度きれいに手を洗う かつおぶしを削る→味見(交替で全員が体験)  おむすび作り 握り方のデモンストレーション 各自握る</p>	<p>かつおぶし削り器2台 かつおぶし2本 手水用のボール お皿</p>
<p>11:25 <b>お味噌汁</b> かつお節 とろろ昆布 みそ ねぎ</p>	<p><b>みそ汁用のお湯をポットに準備</b> お椀の中に味噌を入れて、少しのお湯で溶く かつお節、とろろ昆布を入れて、お湯を注ぎ、ねぎを入れる</p>	<p>ポット</p>
<p>11:40</p>	<p>「いただきませー!」 疲れた子どもたちに麦茶の用意</p>	<p>食器の準備 お椀、中皿、箸、グラス</p>
<p>12:00</p>	<p>終了次第片付け</p>	



## 放課後楽校

講師：阿部 進 京都市山科区・大宅児童館

### ワークショップ概要

放課後子どもクラブの、放課後児童全員が参加する「放課後楽校」を実演しました。午前中は、指導員を対象として、指導ポイントを交えながらプログラムを実演。また、放課後児童が来館する午後からは、実際に放課後児童を対象としたワークショップを行い、プログラムの検証を行いました。

開催日時：2009年2月6日（金） 10:00～12:00（指導員対象）

15:30～17:00（児童対象）

場所：京都市山科区・大宅児童館

指導講師：阿部 進

参加者：[指導員対象] 37名

[児童対象] 53名 小学生（1～3年生）

### ワークショッププログラム

- ・ おもしろサイエンス → バクハツ / 輪ゴムはエライ！
- ・ おもしろ国語 → 漢字はかせ
- ・ おもしろ社会 → 地図はかせ 1道1都2府43県の名前と位置をおぼえよう

### はじめに ～ 指導員に向けて ～

- ・ 放課後は、「ひたすらに楽しくおもしろく、そして為になる。」ことをするところ。放課後はこないといけないところではない、だからこそ楽しくなければなりません。
- ・ 学校では教えない、やらないことをやるのが大切。
- ・ 放課後でやれることをどんどん探すことは、楽しいことである。私たち（指導員）がおもしろがらないとだめ。聞かれて困ると思うことは、子どもに聞けばいい。
- ・ 体制を整えていくことも大切。市民運動で長年訴えていけば、それが認められることもあります。

## 展開内容

### 1. おもしろサイエンス 輪ゴムはエライ！

1. 手伝ってくれる人（助手）を呼んで、前に出してもらい、みんなを前に集めた後、道具（シャベル・バケツ・砂）を指して「これは何ですか？」と訊ねる。
2. 輪ゴムを選びたい人！と声をかけて、手を挙げた人に輪ゴムを選んでもらう。丸棒をとって、輪ゴムを通す。
3. 助手の人に、砂をシャベル一杯（200 g位）入れてもらう。
4. エー！と気合いをいれて、持ち上げる。（バケツの底が動いた時が、持ち上げ時）
5. 何度か繰り返し、10杯ほど砂をいれて「これで最後です！」と声をかけて持ち上げる。
6. 切れそうなくらい伸びきった輪ゴムを見て、子どもたちはハラハラ、ドキドキ。輪ゴムがこれほどまで、重いものを持ち上げても大丈夫なんだ、と感激します。
7. 輪ゴムを選んだ人と助手を表彰して、輪ゴムを欲しい人にプレゼントして終了。

### 2. おもしろサイエンス バクハツ

1. フィルムケースのフタを閉めた時に、いい音がするかどうか確認する。
2. フィルムケースに湯を 1/3 入れる。
3. バブのかたまりを入れる。
4. すばやくフタをパチンとしめる。
5. 紙コップをかぶせる。
6. とにかく、素早く逃げる。
7. ポーンとフタが飛ぶ。すると子どもたちはキャーと歓声を上げ、再びチャレンジしに向かいました。

#### <準備物>

丸棒  
輪ゴム（新品1箱）  
園芸用小スコップ  
小バケツ  
山盛りの砂入り大バケツ

#### (指導のポイント)

くだらないこと、なんでもないこともオーバーに見せる。よりおもしろくみせることを心がける。

#### <準備物>

・フィルムケース ※  
・バブのかげら ※  
・湯  
・雑巾 ※  
・バケツ  
・紙コップ ※  
※1人1つ必要なもの

#### (指導のポイント)

基本を最初にやってみて、その次にお湯の温度を変えてみたり、新しい方法が出来たら教えて、という、いろんなやり方を考えてくれます。なぜ、こうなるのかということを教えてはだめです。いろいろと実験してみることが答えを知ることよりも大切です。

### 3. おもしろ国語 漢字はかせ (小学1年生80字用)

訓読み、音読みを大きな声で読んでいきます。植物・身体・自然など仲間ごとに分類された漢字を読んでいく中で、訓読みと音読みの違いをリズムで体感していきます。次に漢字をバラバラにして、意味を想像してみる。

<準備物>

(おもしろ国語)

漢字はかせ 小学1年生80字用

(おもしろ社会)

地図はかせ 道都府県名カード

### 4. おもしろ社会 地図はかせ (道都府県名カード)

47 都道府県の名前が書かれたカードを、1人1人地域別に分けてみます。次に日本地図の形に並べます。できたら、大きな声で北から南へ節を付けて名前を読み上げます。

(指導のポイント)

※漢字はかせと地図はかせ共通

- ・覚えるためには声を出すことが大切。
- ・まとめを必ず、子どもにさせること。

### 最後に ～指導員に向けて～

- ・放課後では、子どもが子どもを教えます。だから、4,5,6年生の参加が必要です。高学年も低学年に教えることで、役割をまかされて元気を取り戻していきます。
- ・放課後が学校を救うんだ。そう思っががんばって欲しいと思います。

### ● 京都市児童館で行われている学童クラブの概要

京都市では、児童館・学童保育所で「学童クラブ事業」を行っています。この事業は、保護者の就労などで、放課後に保護する者がいない家庭の低学年児童を安全に保護し、かつ、健やかに育成する事業で、社会福祉法人等の公共的団体に委託して実施しています。日常は、専任の職員が児童の指導にあたり、放課後の子どもたちの生活の場として、活動しています。実施日は、日曜・祝日・年末年始を除き、平日は放課後から午後6時まで、土曜日・小学校長期休業は、午前8時30分から午後6時まで(平成21年度途中より午後6時30分の予定)です。

対象児童は小学校1年生から3年生迄で、平成2年度からノーマライゼーションの推進の観点から、障害の児童の受け入れを行っています。(現4年生迄)また、障害の程度に応じて介助者派遣事業も行っています。現在、111の児童館、16の学童保育所で実施され、約8千人の登録児童があり、今後ますます増える傾向にあります。京都市では昭和53年に、広く地域児童の健全な育成を図るという児童館のひとつの機能として児童館事業に統一一元化し、「1中学校区に1児童館」130館を目標に、学童保育機能を有する児童館の整備が始まり、進められています。

平成22年度にはその目標の130館が達成される予定です。今後においては、国では「放課後子どもプラン」が創設され、京都市においても、「自主的な学びの場」と「安心・安全の居場所」を充実する『放課後まなび教室』と、「児童の健全育成の場・昼間留守家庭児童の生活の場」として重要な役割を果たしてきた『児童館・学童クラブ』の連携を図っていくことが期待されています。

児童対象

# 飛ばすおもちゃを作ろう！

ー 連凧、ブーメラン、吹き矢作り ー

講師：竹井 史 場所：京都市山科区・大宅児童館

## ワークショップ概要

空を飛ぶおもちゃを作ってみようということで、連凧を中心にブーメラン、吹き矢、竹とんぼを作り、遊んでみる。3連の凧には、子ども達が筆を使って、1枚1枚に絵を描いて完成させた。

開催日時：2009年2月7日（土） 10：00～12：00

場所：京都市山科区・大宅児童館

指導講師：竹井 史

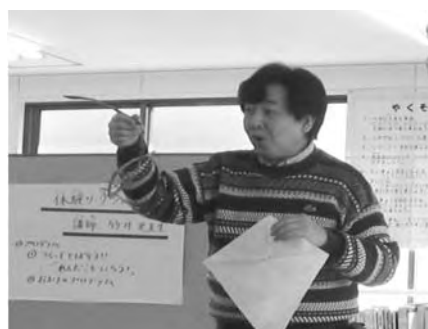
参加者：小学生（1～3年生） 48名

## 展開内容

### 1. 連凧を作ろう！

子どもたちに連凧を知っているか、先生から質問。「一番長い連凧はどのくらいの数になるか、わかるかなあ？」という質問に、子どもたちからは「1000枚！」、「3000枚！」などと声のとびました。正解が1万枚以上ということを聞いた子ども達からは大きなどよめきがでました。

そこで、今回作る凧が登場。「今回はこの凧を作ってもらいます。みんな、この凧は何でできているかわかるかな？」という次の質問に「紙！」と口々に叫ぶ中、「和紙！」という声。「正解。今回はこの和紙という素材を使った凧を作ります」というと、先生は実際のコウゾを取り出しました。「和紙っていうのは、コウゾっていう植物の繊維で作るんだよ。今日はそれだけ覚えておいてね」という話してから、実際に連凧作りがスタートしました。



## 2. 凧に絵を描こう！

今回、子ども達には和紙に筆を使って絵を描いてもらいます。すぐに描きはじめる子、なかなか思いつかなくて筆が進まない子、それぞれですが、徐々にペースも上がってきます。凧にタコを描いてみたり、5色の色を使い分けて、きれいな模様を描いてみたりと、思い思いに3枚の絵を完成させました。



## 3. ブーメラン、吹き矢、竹とんぼ作り

絵を乾かしている間に、手のひらにのる小さなブーメランやストローを使った吹き矢などを作りました。指で弾いて飛ばすブーメランを作るには細かいハサミづかいが必要です。また、余ったストローで笛を作り、みんなで鳴らしました。鳴らすコツがうまくつかめず、フーフーと息を吹いていました。



## 4. 凧作り

絵を描いた凧に骨組みをつけて、いよいよ完成です。凧をまっすぐに折って、竹ヒゴを乗せるラインをしっかりと作る。また、組み合わせた竹ヒゴをセロテープで裏から止めます。3枚の凧を表から順番に凧糸を通し、シッポをつけて完成です。

3枚の凧を等間隔に輪ゴムで留めるのですが、これが想像以上に難しく、竹井先生や児童館のスタッフたちに手伝ってもらいながら、完成しました。



## 5. 最後に

今回は参加人数が多く、時間も短かったため、凧も市販のキットを使用しました。また、できあがった凧を実際に外で飛ばすことができなかったのは残念でした。みんなが作った凧をつなげて、長い長い連凧にして、飛ばしたらきっと壮観だったと思います。



児童対象

## 缶笛を作ってあそぼう

講師：柴田 礼子 場所：東京都港区・放課 GO → あざぶ教室（麻布小学校）

### 開催概要

開催日時：2009年2月25日（水）15:30～17:00

場所：東京都港区・放課GO → あざぶ教室（麻布小学校）

指導講師：柴田 礼子

参加者：小学生（1～3年生） 20名

### 展開内容

始まりの挨拶をした後、ボイスチェンジャーという声の高さが変わるおもちゃで、様々な「こんにちは」を発し、子どもたちの緊張をほぐすようにして始めました。

#### 1. ウォーミングアップで元気いっぱい！

いろいろな国の言葉で挨拶をしながら、ボディタッチをしていく『ハローボディ』では、いろいろな国の言葉を使って、子どもたちは、今までとは違うコミュニケーションを体験しました。普段、体を接触させることが多くないので、ボディタッチを通してスキンシップの大切さを感じると共に、体の力のコントロールも覚えていくことが重要だと思います。

いろいろな楽器や笛の音に反応して、動いたり止まったりする『ストップ＆ゴー』では、音によって自然に体の動きが変わっていくことや、環境によって触発される自分の体と気持ちを感じる手立てを体験しました。

#### 2. 缶とあそんでみよう！

缶笛づくりに入る前に、子どもたちと缶と出会うことを通して活動に入っていました。最初に、ビー玉で缶の底を叩く音



を聞かせて、音の発見をしていくようにしました。子どもたちは集中して音を聞き、いろいろな音を試して遊んでいきました。そこで新しい音を発見したりして、なるべくみんなの音のアイデアを拾うようにしました。小さな発見の際にちゃんと称賛の言葉を発し、みんなに認めてもらえるような場面づくりをしていくことは、子どもたちの存在を承認していくという意味において、重要なことだと思います。

また、缶に書いてあるエコマークにも注目してみました。アルミとか、スチールとか、そこに文字がないと意外にわからないものです。他にも記号を調べてみると、とても楽しいと思います。

### 3. 世界にたった一つの缶笛を作ろう！

自分だけの缶笛という意識で、音や吹き方を工夫していくと、より新しい発見ができたり、楽しい見せ方ができます。必ずしも音が勝負ではなく、楽器そのものの美しさや吹くポーズでも勝負しても良い訳です。人前で楽器を演奏することが苦手ということも、手作り楽器の場合は、「私の音、聞いて〜！」「私の楽器、見て〜」と、喜んで人前で披露したいのです。

ストロー笛の紹介もしました。ストロー笛はやったことがない子も多く、ストロー笛に穴を空けて音程を作ったり画用紙を巻いてメガホンのようにしたりと、バージョンアップ版も行い、子どもたちは夢中で作っていました。ストロー笛は音を出すのが少しむずかしいのですが、ちょっとした工夫で音が出た時は、みんな満面の笑みを浮かべていました。

### 4. 缶笛で音遊びをしよう！

次にパペットや指揮人形を使って音遊びをしていきました。そして、ここでも指導者だけが指揮の役割をするのではなく、子どもたちにもその役割を振り、指揮者になってもらいました。また、音を出す方法にはいろいろあること、音の出し方を自分たちで工夫しても良いのだということも、体験していくと良いと思います。ここでは「図形楽譜」も使いましたが、それも良く見て、良く聞いて、当てっこを楽しみ、リズム模倣も上手にできていました。



## 5. 缶笛選手権に出場しよう！

ここで、自分たちで試す時間を確保していきました。それも何で勝負するかは、一つに絞らず全てのグループに1つずつ用意します。缶笛の音を発表するために、缶笛選手権というストーリーを作って、そこに出場するということで、音をそれなりに試すこと、仲間と工夫すること、一緒に演奏することを楽しみました。ここでは長く音を出す部門とか、おもしろい音部門のように、必ずどこかの部門でエントリーできるようにしました。そういう風にグループを分けて、楽しく競っていくことも、子どもたちの探究心とやる気を喚起していくことになりまます。またグループ内でお互いに意見やアイデアを出し合ったりしていくことは、子どもたちの創造性を養っていく恰好の機会になっていきます。



## 6. 第1回放課GOあざぶ教室缶笛選手権本番です！

缶笛選手権という選手権を作って、遊びのフィナーレにしていくことで、活動そのものを盛り上げ、自分たちのものを発表する体験に繋いでいきました。ここでは、その部門で必ず賞がもらえるということにし、それぞれに賞状を作っておき授与式も行いました。自分たちの思いや、嬉しさを人前で出す勇気を持たせ、それを認めていく場面が非常に重要であると思います。

これを機に音遊びや素材遊びなど、新たな遊びが継続的にできるようになるよう願っています。



児童 & 指導員 対象

## 石であそぼう！

講師：直井 玲子・田島 美帆 場所：千葉県四街道市・四街道地区コミュニティセンター

### ワークショップ概要

身近にある「石」をテーマにワークショップを行いました。まず活動場所の中で石を探すところから始まり、子どもたちと出会い、じっくり石を見たり触ったりして、素材と向かい合いました。その後、石に目のシールを貼って擬人化し、「石の居心地の良い場所はどんなところ？」というテーマで絵を描き、その絵の中で、石のごっこ遊びを行いました。

開催日時：2009年3月4日（水）15:30～17:00

場所：千葉県四街道市・四街道地区コミュニティセンター

指導講師：直井 玲子、田島 美帆

参加者：小学生（1～3年生）、保育科学生、安全管理員 他 約70名

### 展開内容

#### 1. ハイ、タッチ！コミュニケーション

参加者同士のコミュニケーションを図るために、まず直井先生がリーダーとなって、手拍子回しなどの即興ゲームを行いました。

→その間、田島先生は隣の部屋でいろいろな場所に、石を置いたり、隠したりと、次の展開への準備（環境整備）。



#### 2. 行列ゲーム！仲間と遊ぼう

3つのグループに分かれて、いろいろな対抗戦ゲームを行いました。仲間同士のスキンシップと、声や身体を使った心身のウォーミングアップが目的です。早く並び終わったグループが、チャンピオン！

- ①背の高い順に並んでみよう！
- ②誕生日が早い順に並んでみよう！
- ③身体が柔らかい順に並んでみよう！
- ④長く声が出せる順に並んでみよう！

→今度は、田島先生がリーダーとなって、直井先生がサポーターに廻り、遅れ気味のグループをアシスト！前のゲームからの展開がスムーズで、息はぴったり…

### 3. ボディ・シェイプ

「石（いし）という文字が含まれている言葉を、どんどん挙げてみて！その言葉の中から、一つ選んでそれを身体で表してください！」そして、それぞれのグループが発表したのは、「石焼きビビンバ」、「石焼きいも」、「お（いし）い」



「石焼きビビンバ」を身体で表現

### 4. 石は友達！！石の擬人化～見たて遊び

先ほど田島先生が部屋のいたるところに配置した石を子ども達に見つけてもらいました。どんな石が集まった？どんな色？どんな大きさ？かたち？

そして、石に目のシールを貼って名前をつけ、仲間の石と一緒に並べたりして、石の見立て遊びを行いました。



## 5. 石の居心地が良い場所ってどんなところ？

ここから、リーダーは直井先生に交代。それぞれ、自分の石に合う色画用紙を選び、自分の石の居心地が良い場所を考えてもらい、画用紙に絵を描いたり、シールやビーズ、綿などを貼って、それぞれの「石の世界」を創りました。



## 6. 作品発表

全員の作品を並べて鑑賞し合いました。自分の石を、他の人が描いた絵の中に遊びに行かせ、そこで石の世界を共有しながら、石を媒介物としたごっこ遊びを行いました。



### 【指導のポイント】

今回は、身近な自然素材である「石」をテーマにしました。季節に応じて、葉っぱ、どんぐり、まつぼっくり、貝殻など、他の自然素材に変更することが可能です。それぞれの自然素材の特徴を活かすことができれば、活動の展開は更に広がることでしょう。また、今回は、指導員役の講師2人で行いました。一人がリードしている間に、もう一人が次の準備を行ったり、創作活動がうまく進んでいない子のサポートをするなど、よりきめ細やかな進捗と、こどもへの対応が可能になります。



# 放課後活動を支えるための試み

---

I. カバゴン流「放課後子ども教室」づくり 阿部 進

II. 放課後活動の現場に相応しい企業支援の在り方

～ 放課後活動支援(CSR対応)プログラム～ NPO法人キッズエクスプレス 21

# 1. カバゴン流「放課後子ども教室」づくり

阿部 進

## 1. まず、「場所」を確保すること

現在の、放課後子ども教室の活動の主体は無償ボランティアです。もともと放課後の子どもたちを何とかしなくては、という熱い思いの人たちが集まって自然発生的にできてきたのが始まりです。公園とか広場で始まり、やがて学校開放(ゆとりある教育によって、「土曜日は地域で子どもたちをみよう」と提唱され、そのための施設は地域のものである。そこで学校の積極的協力が必要)の大切なことを、文部科学省は言ってきたのです。いくつかの学校はそれを実施しました、しかし、地域の中の学校という意識を持たずに今日に至っているところもあります。市民活動の中から「学校の施設を開放してほしい、運動場、体育館を使わせてほしい……」という声は多くなり、やがて、それは図書館、理科室、空き教室の活用へと進んできています。

横浜市の全 360 小学校の放課後子ども教室は、今「はまっ子スクール、はまっ子キッズ」という名で、学校とは別の独立した建物、施設で運営されています。しかも、市から運営費が支出されています。子どもたちは、学校と同じ敷地内ですが、放課後子ども教室に「ただいま」と帰ってきます。ここは、家に帰るまでの安定した子どものベース基地です。これがなくて、「今日はここ」「明日はここ」では、子どもは落ち着きません。場所が確保されれば、そこのテンポ、リズムができてきます。

親たち、特に今、働くお母さんがどんどん増えてきています。そのお母さんが安心して子どもを預けられるところといたら学童保育所でした。ここは厚生労働省の管轄にあります。でも3年生までです。

児童館もありますが、毎日のプログラムを持っているところは少なく、週1回とか、2回です。毎日預かってくれるところは少ないのです。

沖縄は、児童館、学童保育所がたくさんあります。民間有料経営です。ですから、どうしても子どもたち(小学校高学年を含めて)を預かってくれる場所がほしいのです。もう民間ではこれ以上は無理、何とか学校内に放課後の居場所づくりの設置が現実のものとなってきています。

## 2. 放課後の居場所確保の次は、お金

文部科学省は、放課後子ども教室(以下、[放課後]という)づくりにお金を出しています。16年~18年度まで教室づくりには100%、助成金を出しています。「[放課後]の必要性、重要性を確認しました。19年度以後、無期限でお金を出しましょう。但し、県が3分の1、市町村が3分の1、国が3分の1負担」となったら、県、市、町が予算難を理由に手を引いてしまったところが出てきました。「主旨は理解できるが、予算化しにくい」という県、市町村が多いのです。しかし、横浜市、川崎市、京都市などを見てください。首長の考え、行動によって、[放課後]に対する活動費を予算化しています。市民の支持、感謝の気持ち、行政に対する信頼度は高まっているのです。県民、市民のための首長。親たちの一番の願いは、子どもたちの安心と安全です、それを一番に考えてくれ、行動をしてくれる首長、それを県民、市民は望んでいます。首長選挙のときは、市民の声として、「[放課後]をどう考えているか? どう発展させてくれるのか?」を首長候補者に質問するこ

とです。その考え、約束を取り付けることです。どなたが首長になっても、[放課後]に力を入れていただく、そんな方を選ぶことです。せっかく国が3分の1用意してくれているのですから、これを活用しない手はないと思います。

### 3. 広く「資金」を集める、つくること

行政のお金を期待するだけではだめです。[放課後]を運営していこうと考えている人は、広く資金を集めることも必要です。差し当たって、地元の企業です。現在、大不況下にあるので、具体的に[放課後]にお金を出してくれるところは、なかなかありません。[放課後]の活動テーマの中に、「キャリア教育」的要素を入れてみるのも手です。地元の商店街と提携して、子どもたちが、エコマネーを稼ぐシステムを取り入れるのです。例えば、地域に住む老人たちのお使いをする、掃除をする、身の始末の手助けをする、そのお礼としてエコマネーをもらうのです。また、お使いに行った先のお店からも「お使い賃」として、エコマネーをもらうのです。昔の子どもが自前のお金を持っていたのは、こうした「お駄賃」を稼いでいたからです。その貯まったエコマネーは十分社会に通じるようにするのです。エコマネーで買える品物が商店街にある、おやつも学用品も、自分のエコマネーで買う、つまり子どもの自立です。

そうならば、「[放課後]は1時間いくら?」と、教育費を支払うことも可能となるのです。子ども自身が自分たちの居場所の存続のための資金をつくることになります。保護、育成することだけが、[放課後]の仕事ではありません。「生きる力とは、自らが作り出すのだ」ということを、金銭を稼ぐことはこういうことだ、と教えていくことになります。他に、街の中の公園の清掃、トイレ、公共用品の維持管理までやらせ、正当な金銭を支払うことなども、

キャリア教育のテーマになると思います。大人たちには「〇〇放課後教室運営の会」をつくり、そこにお金を集めます。まず、子どもたちの親であるPTAからです。[放課後]は、学校からもPTAからも独立した運営が望ましいのです。「金を出す、口は出さない」をモットーにして、PTAはお金を出すべきです。そのための[放課後]の資金を含めた会費をとるべきです。「うちの子は、[放課後]には行っていないから……」の理屈は成り立ちません。これから先、ますます、沖縄型女性活動の時代に入ります。[放課後]こそが、わが子の育つ場所と位置づけてお金を出しましょう。そして、その次が企業にお頼みます。企業として、出せるところがあるはずで

### 4. 「プロフェッショナル」を呼ぶ

[放課後]を魅力あるものにしないといけない。そのためにレベルの高い内容、その展開が必要です。子どもを預かって親が迎えにくるまでの安全と安心を保障するのはもちろんです。しかし、最も重要なのは中身です。子どもたちが「今日の[放課後]は何だろう?」とワクワクしながらやってくる、「昨日以上に面白いことは何?」を求めてやってくるように仕向けるためには、仕掛けが必要です。従来スタッフだけの創意工夫では、手詰まりになります。

そこで、外部の力を借りることが必要となります。それもその道の一流のプロフェッショナルを招くことです。一度か二度は、善意、好意でお呼びすることは可能です。継続してきていただくとなれば、きちんとした謝礼を用意してお呼びすべきです。精一杯の謝金を用意してこそ、レベルの高い[放課後]になることができるのです。よく「教育のことだから」と言って、「安くて当たり前」という考えがあります。教育のより高いレベルへの到達を考えれば、最大限の謝礼を持って、プロフェッショナルに

こたえるのが礼儀です。その誠意が見られれば、「そんな程度のお金では行けません」という人は、私の経験ではありません。みなさん、気持ち良く来ていただいています。また、私も意気に感じて、プロのはしくれとして出かけていきます。一流のプロフェッショナルのインパクトは強烈です。子どもたちに「一期一会」の感動を与えます。そのさまざまな出会いを演出することによって、その「放課後」の素晴らしさ、信頼度、期待度が高まり、より広い層からの支持が得られます。お金を惜しみなく出して、プロフェッショナルを呼びましょう。そして、「放課後」のリーダーたちは、その技を学び、身につけ、自らもプロフェッショナルになる道を開くことです。

## 5. 「学校理解」を取り付けること

全国のトップレベルにある横浜市の「放課後」の活動にも、悩みはあります。それは、学校側が、しばしば積極的に放課後にのぞきにきてほしいという要望が実現しないことです。「放課後」はしっかりやってくれている」という安心感から、学校は教室の学習活動に専念できるという関係が成り立っています。しかしながら、「放課後」リーダーたちは、日常的に学校との密なる連携を望んでいるのです。「うちのクラスの〇〇くんの出席、活動状況はどうか」とか、「今日の、今週の「放課後」のテーマは？」など、毎日とは言わないが、週一ぐらいで連絡し合ってみるなど、積極的な学校側からのアプローチを願っています。「どうせ、シロウトの集まりで、しょせん学校のおまけにすぎない」と思われているのではないかと感じるという、「放課後」関係者の声もあります。そんな中、校長先生がちょくちょく顔を出してくれるという「放課後」がありました。「週に2、3回、校長先生が顔を出してくれる。〇年〇組の〇〇くんが、こうだ、ああだ」と話すと、

その子の担任がやってきて詳しく話を聞きにくる。そして、「放課後」での〇〇くんの活動をクラスの人たちに紹介してくれる……。また、学校で取り上げないような中身を「放課後」で学習し、それが職員会議で話題になり、全校に広がり、「放課後」への先生方の関心が高まった。まさに「学校と「放課後」は合わせて一本」、まさにリーダーシップとしての校長先生の在り方の見本のような例だと思えます。

## 6. 「放課後の存在感」の確立

学校側は「放課後」に対して、「こんなことはできないか」「こんなことを考えてほしい」「学校はここまでが限界だ、その先は「放課後」にまかせたい」ということを、どんどん出すべきです。例えば、「身につく、身につかせたいこと」、「一人ひとりが自分の特性を発揮できるようなこと」、「それをやってほしいということ」など、例えば、本来、親がやるべき「しつけ」など、「放課後」に頼んでみることです。あいさつの仕方、「よろしくお願いします」、「ありがとうございます」。今、これができる子どもが少ないのです。学校でも、これはきちんとやられていません。口の中でもごもごしている、はっきりと声をはってあいさつをする、を頼んでみることです。

また、数の唱え方も良いでしょう。「1パイ、2パイ、3パイ……10パイ」と、物を数える呼称でも、現実には「1ハイ、2ハイ、3ハイ……」、あるいは「1パイ、2パイ、3パイ……」、これで平然としている子どもや親がいます。それを修正してあげる時間が、親にも学校にもありません。見過ごされてそのままになっているのが現状です。学校での一人ひとりの状況を「放課後」に伝え、それらを修正してもらえたら、学校はどんなに助かるでしょう。こんな身近なところに学校を助けてくれる場所とスタッフがいることを知るべきです。

「放課後」は、「放課後」でもっと学校に売り込む



べきです。国語だったら漢字の読みの手伝いをしましょう。表向き、小学校の漢字の習得数は1006字です。学年で言えば、1年生80字、2年生160字、3、4年生200字ずつ、5年生185字、6年生181字、合計1006字です。実際は、音訓読みでみると、1750字以上読めないといけないのです。倍近く多く読めないと、習得したことにはならないのです。例えば、「上」という字の読み方は6つ以上、「下」は8つ以上もあるのです。それらの読み方を知っていないと、文章を読み取る、読みきることができないのです。学校の授業の中では、それは物理的に無理です。時間がないのです。それを「放課後」は受け持てばいいのです。その例として、横浜市戸塚区の川上小学校「はまっ子スクール」の「漢字塾」は、すごいです。毎週1回、定期的に開かれています。

お母さんリーダーが中心になって、「漢字習得検定」をやっています。なんと、3、4年生で、6年生までの音訓読み合格者が続出しているのです。その中からアシスタントの児童が出現、検定補助から日常的な個々の習得の手伝いをする子まで育っているのです。学校から感謝されてしかるべき活動がここにはあります。さらに理科の実験まで、ここのお母さんリーダーは手がけています。面白い実験、楽しい実験、学校では絶対やらない実験を探して、自分たちがまず面白がる、楽しくなるものを練習して、子どもたちに公開する……まさに、全国「放課後」の鏡です。そんな見本を見にきてください。ブラボー「放課後」の頂点をそこに見ることでしょう。

## ● 横浜市スペースみなみの概要

横浜市内18の区があります。西、中、南が中心の区になります。その南区の横浜市大病院の一部移転後のビルが子どもと福祉事業用に開設されました。区及び区民より依頼されNPO法人の教育支援協会神奈川支部が運営をしています。(私は全国顧問でスペースみなみの講師です。)横浜市内360の小学校全部に放課後教室が設置されほとんどがNPO団体が運営しています。その学校の子どもが集まります。

スペースみなみは区全域からの子どもを集め運営しています。公立、私立を問わず区内の子どもであれば参加できます。但し定員が決められているため「空き」がないと入室できません。

現在数値目標を3つかかげています。

1. 1日1時間以上の家庭学習の習慣を育て自分で学習する子を育てる。
2. 「不思議だな」「おもしろいな」と2つ以上のやりたいことをもった子どもを育てます。
3. 人に負けない自信をもった教科を1つ以上ある子どもに育てます。

そこで「学校で教えない・教わらない」放課後独自のプログラムを作り実施しています。(1.放課後イングリッシュ 2.おもしろサイエンス 3.漢字・素読暗唱 4.創作 5.自然体験 6.だがしや楽校(奉仕活動)など……。)

## II. 放課後活動の現場に相応しい企業支援の在り方

### ～ 放課後活動支援（CSR 対応）プログラム ～

NPO 法人キッズエクスプレス 21

#### 時代的背景からの提唱

本誌の巻頭でも記述しましたが、今後の展開として考えていかなければならないのが、企業からの CSR 的な支援や活動参加を積極的に取り入れていくことです。そのための方策として、効果的で、具体的な CSR 対応のプログラムが必要となってきます。

景気が良くない状況においては、企業からの支援はなかなか厳しいものがあります。逆に、こういう状況だからこそ、多義に涉って効果的な支援の在り方を考え、提唱していくことが、とても重要なことであると考えています。

その理由として、一つには、働きたい、働かなければならない母親が増えてきたことです。母親が乳幼児を預けたいと希望し、保育所の待機児童が増えてきている状況も同様な現象として起きています。また一つには、何かと多忙な学校の先生が教えきれないこと、家庭の親が面倒を見きれないことが、多感な子どもの発育に大きな影響を及ぼしていると言われています。これらのことは、社会全体に大きな責務として押し掛かってきているもので、企業も社会責任の一端として、担うべきものではないでしょうか。

企業側のもう一方の側面から考えてみますと、次のような理由があげられます。一つには、時勢がら、広告宣伝費にかけられる資金も限られ、少ない予算で効果的な PR 手法が求められています。例えば、アクセス数が多いインターネットホームページへの広告等、バスや電車のラッピングカーなどは、TV コマーシャルや新聞広告のように多大な費用をかけずに効果的な PR ができる手段として盛況のようです。

また一つには、ピンスポット市場への媒体としてのフリーペーパーや、幼稚園・保育所や美容院・理容室等の目的が絞られたユーザーが介在する場所に、サンプリング等を行う手法が脚光をあびています。

このような状況を踏まえ、且つ、両側面の視点を兼ね添えた、放課後活動支援のプログラムづくりを行うことによって、放課後活動の現場に相応しい企業支援の在り方、また、保護者が子どもを預けたいと願う場の在り方、そして、それを受けて、放課後現場を担う指導員の役割りなど、‘想い’が重なり合うものと考えています。

#### 具体的な観点

小・中学校を対象とした「総合学習」等の出前授業では、企業の研究員や広告宣伝部門のスタッフが、児童の現場（学校）を訪問し、企業の資源となっているコンテンツや商品を提供しながら、独自のプログラムをもとに授業を行う活動が一部で実施されています。

しかし、企業側から提供される一方的なプログラムのために、イベント的に行われる内容が多く、子どもの現場に相応しく、また継続的に関わることができる発展的な取り組みや、活動の主体が子どもたち自身に委ねられるものが少ないのが現状です。

放課後活動は、学校の授業のように強制的に義務付けられているものではありません。主役の子どもたちにとっては、毎日が楽しく、面白い出会いがないところには、無理して行かなくても済むわけです。一方、預ける保護者にとっては、塾的な、或いは、スポー

ツクル的な意味合いの場所に、子どもを預けたい、行かせたいと願っています。この事は、地方行政が行った放課後活動に関するアンケート調査結果などでも、「子どもを預けるのであれば、身に付けることをさせたい」「いろいろな体験をさせたい」等、保護者からの要望が多かったことでも裏付けられています。

このような観点から、子どもが主体となる「放課後の場」において、次代を担う子どもたちに必要な「体験の機会」を提供するためのプログラムとして『放課後活動支援 i - ku サポートプログラム』を構築することは、とても有意義なものであり、とても期待されているところと言えます。

## オリジナルな手法

『放課後活動支援 i - ku サポートプログラム』における、具体的な CSR 対応プログラムは、大きく2つの手法を考えています。

一つは、出前授業のように、現場へ出向く「アウトリーチ」的な手法です。しかし、特定の講師や演者が担わなければならないようなプログラムでは、活動の費用対効果や効率的な展開が望めません。プログラムとして、わかり易くシンプルなもので、放課後現場の指導員が担える程度にコンパクトに仕立てたものが理想です。また、非日常的な性格ではありませんが、決して奇をてらったものではなく、子どもたちが主体となって、家庭や地域を巻き込んだ、コミュニケーション重視の楽しいプログラムが求められます。

もう一つは、特定のプログラムによる活動支援ではなく、『放課後活動支援 i - ku サポートプログラム』全般を包括的に支援する「スポンサード」的な手法です。この場合は、グローバルな理念と大らかな社風を持ち合わせた企業が支援先になると考えています。

## 「放課後活動支援 (CSR 対応) プログラム」とは…

本年度の事業においては、『放課後活動支援 i - ku サポートプログラム』構築の一環として、「CSR 対応プログラム」を模索し、思考してきました。

### ◎ 『テーマ』 について：

時代的背景等から考えられる具体的なテーマについては、訪問した数々の放課後現場から、また様々なジャンルの専門の方々との協議（専門委員会）を重ねることによって、俯瞰的な視点から志向しました。

### ◎ 『手法』 について：

オリジナル性の高い手法については、他業態の類似事例や文献資料等をもとに、調査研究を積み重ね、独自のスタイルを考案しました。

その結果、次の「コンセプト」に基づいてプログラムを構築しています。

1. 年間を通した‘テーマ’を持ち合わせた活動とする。或いは、毎年度決まった行事に照準を合わせた‘テーマ’を持ち合わせた活動とする。
2. ‘主体は子ども自身’であり、日常的に放課後現場の指導員レベルで賄えるプログラムとする。
3. 子どもの‘体験活動’に主眼をおき、関わる人たちと共に、幼少の頃の“原風景”として焼きつくような活動とする。
4. 次代を担う子どもたちのために、現場に預ける保護者の想い、現場を担う指導員の想い、そして、現場に架ける企業の想い、が“三位一体”となった活動テーマとする。
5. 次世代育成支援の施策を超越した‘夢’のある活動とする。

「コンセプト」をもとに、放課後活動を支援する（CSR 対応）プログラムを考案しました。

#### A. アウトリーチ的な手法のプログラム

- ①食品メーカーを想定した「食材の保存と調理」のプログラム（食育）
- ②飲料メーカーを想定した「創作あそび」のプログラム（遊育）
- ③化学メーカーを想定した「おもしろサイエンス」のプログラム（知育）

#### B. スポンサー的な手法のプログラム

「漢字はかせ」の学習シートダウンロード等

## 今後の展開へ

2006年12月22日、約60年ぶりに改正された『教育基本法』では、家庭における「教育」、学校における「教育」、地域社会における「教育」と、これからの教育の在り方が明確に標記されました。その中で、「地域社会教育」においては、地域の安全・安心の確保、社会性の低下・モラルの欠如、地域社会における連帯感の希薄化、基本的な生活習慣の乱れなど、「放課後活動」の現場に求められる使命が裏づけられています。

地域社会における関わり手として、地域住民（市民）のほか、「企業市民」とも呼ばれる企業も、従業員を通じて、また企業活動そのものを通じて、地域社会と深い関わりを持って、社会の一員として役立つ事業活動を行い始めています。

今回の事業において、「放課後活動支援（CSR）プログラム」を考案し、企業市民と言われる企業へ、プレゼンテーションを行っておりますが、なかなか動き始まるまで行き着かないのが現状です。しかし、昨今の景気低迷によって、CSR的な機運は下がっているように思えますが、次代を担う子どもたちへの支援を欠かして、明るい社会はあり得ないと、誰もが思うことだと思います。今後、より現実に即した提案のなかで、「放課後活動支援（CSR）プログラム」の普及を図っていきたいと考えています。

# 放課後活動のこれから

---

- 「放課後子ども教室」の今後の課題について 阿部 進
- 指導員へ向けた「創作あそび」放課後活動へのアドバイス 竹井 史
- 指導員へむけた「音あそび」放課後活動への提言 柴田 礼子
- 「食育」の視点から見た放課後活動への提言 相澤 菜穂子
- 健全な子どもの身体～放課後児童の発育を現場から発信～ 渡辺 美佐子

# 「放課後子ども教室」の今後の課題について

阿部 進

## 1. 放課後子ども教室（以下、[放課後]という）はおまけではないという自覚

横浜市・川崎市では、[放課後]は単なる子どもの居場所、預かり場所ではない、ちゃんとした独立性を持ったところと位置づけています。その姿勢をつくったのは、市民活動の成果です。市民がこの街の子どもたちのために何をすべきか、何ができるか、という活動です。市民活動でできることとその限界、人の善意、人の好意、人の寄付に頼っていることの脆さ、危うさ。そこからの脱却には、行政の積極的な行動なしでは、成り立たないのです。学校教育そのものを進めるための「おまけ」ではなく、[放課後]独自の活動をすすめる組織づくりを、行政に働きかけることです。[放課後]の一人歩きこそ、子どもの自立性を育て、真の「生きる力」を生みます。「おまけ」からの進歩・発展です。

## 2. お子様一時預かりどころではない

全国的な[放課後]の活動プログラムの主流は、一時預かりどころ的な形態です。学校の授業が終わって5時までの間、つつがなく子どもたちがいられるところ、安全に親の目で保護し、育成の手助けをするところ、それが主流です。余計なことはしない、させない。ひたすら安全に、安定できればよい。

一方、進んで学校での宿題を見てあげる。これは、積極的な行動です。確かに、今の子どもたちは家庭で勉強しません。やりません。[放課後]で宿題を見てもらえたらありがたい。学校側もそれを望みます。しかし、その先を進んだり、直接、学校の中身に関わることになると反対です。学校教育的なこと

は望んでいないのです。

[放課後]は、やはり親が引きとれる時間まで、つつがなく預かってほしい、それ以上のことをやるべきではない、望むべきでもない、これが現実です。これが現在の[放課後]の元気のなさの主因です。お子様預かりどころからの脱却こそが、これからの[放課後]の活性化となります。

## 3. [放課後]の独自性

子どもたちは、[放課後]に何を求めてくるのでしょうか。それは、そこに何か新しいことはないか。おもしろいことはないか。この2つを探しにくるのです。[放課後]はどうしても出席しなければいけない義務はないところです。学校は、出欠席を取り、授業をして、テストをして、評価をして序列をつくります。日常的にそれが繰り返されます。それが終わってホッとして、何かないと顔を出すのが[放課後]なのです。

浜田広介さんの童話に『泣いた赤鬼』というのがあります。人間と友だちになりたいという願いを持った赤鬼が、「お茶もあります。お菓子もあります。」でも、子どもがどうしてもきてくれない。そこでいろいろと工夫をします、[放課後]の在籍している者の内、1日の出席者は、平均20～30%です。それもほとんど低学年、3年生までが主流です。4～6年生の出席者は、ちらりほらりと不定期です。それは、[放課後]がきてもつまらないからです。

## 4. [放課後]は『泣いた赤鬼』の成功に学べ

赤鬼は工夫をします。人間という生き物の特性、望んでいるものは何か。私たちも改めて、子どもた

ちが[放課後]に何を望んでいるかを調べる必要があります。出てくるのは「ここに面白いことはないか、楽しいことはないか」です。家に帰るまでの数時間、「気がついたら帰る時間になっていた」これが理想です。それは、夢中で過ごしていたからと、子どもが気づきます。それは何か？「それは[放課後]にしかないもの」をつくり出すことです。

[放課後]独自のプログラムとは何でしょう。まったく学校とはかけはなれたものはダメです。つかず離れず魅力あるプログラム。アウトドア的プログラムは充実しています。でも、子どもたちのすべてがアウトドア的ではないのです。インドア的プログラムの充実です。ある県の、アウトドア的プログラムは全国一です。ところが、全国的なテストとなると、それが学力と結びついていない。それを結びつけるのがインドア・プログラムです。

## 5. インドア・プログラムの立案・計画

[放課後]はともすると、体育会系プログラムになりがちです。体育会系と文理会系の2つが必要です。文理系となると、直接学校教育の在り方にかかわってきます。学校は教科書中心に授業が進められます。1～6年の段階的プログラムがスケジュールによって進行していきます。無意識のうちに、「手抜き」が出てきます。これは仕方のないことです。その「手が抜けた部分」に[放課後]のやるべき課題が隠れています。

例えば、算数です。四則の計算では、数名詞(すべてのものに名前がついています)が出てきません。 $35 \times 4 = 140$ 。何が35で何が4なのか、結果の140とは何なのか…そのことを考えなしに、計算練習が行われます。応用問題になるとどうしていい分からなくなります。「1クラスは、35人です。4クラスでは何人でしょう」と素早く数名詞を入れて計算すれば、答えはすぐ見つかります。それを教える時間は、学校にはありません。

## 6. これだ。放課後算数、生きる道

平成20年の全国一斉小・中学校学力テストの「小学校6年算数基礎Aの問題」

次のうち、 $150\text{cm}^2$ のものはどれでしょう。①切手、②はがき、③算数の教科書、④教室の広さ、正解は、②のはがきです。タテ15cmヨコ10cmです。ところが、①が3%、③が50%、④が30%で、正解はたった17%です。1クラス40人だと、正解者は6～7人です。驚きませんか？面積の出し方は、タテ×ヨコです。その答えが、 $150\text{cm}^2$ です。ほとんどの子どもが、「 $150\text{cm}^2$ 」とはどれほどのものか、ちんぷんかんぷんだったということです。教室の広さと答えた子どもが30%!! 驚きを通り越して、あきれられます。これが現実です。計算はできても「実際のもの」となると判らない。実際的、体験的算数とは何か？と考えたとき、「[放課後]で算数を教えよう」ということが現実のものになります。

紙の大きさ(面積)を測ってみる。1枚の紙の大きさ、例えば、A4版コピー用紙。これは、タテ約30cmヨコ20cmです。 $30 \times 20 = 600\text{cm}^2$ です。その半分は、 $15 \times 20 = 300\text{cm}^2$ 。4分の1では、 $15 \times 10 = 150\text{cm}^2$ 。見事にはがきの大きさだと言い当てられます。私たち(横浜市のスペースみなみ・他)の6年生は、みごと「はがき」に○をつけたのです。それは、[放課後]で「何でも測ろう」というテーマで、長さ、高さ、深さ、重さを測ってきたからです。数値が身につけていたからです。学校で基礎は教える、しかし、その応用までは教える時間がない。そこに発見があるのです。活路があるのです。

数名詞もそうです、「水が1杯(パイ)、2杯(ハイ)、3杯(バイ)…」と数えます。「水が1、2、3…」では不都合です。ところが、子どもたちに数えさせると「1ハイ、2ハイ、3ハイ…」または、「1パイ、2パイ、3パイ…」と数えて平然としています。「えっ、そうじゃないんですか?」とあっけらかんと聞かれ、びっくりしました。大人もあまりそれにこだわらない。それなら、[放課後]はそれにこだわらしましょう。

## 7. 何にこだわったらいのか

子どもの勉強、学校での読み書き、算数の勉強に絡む、もっと実際的で子どもたちにとって現実的な課題です。さっき習ってきたことが、[放課後]で話題になる。そこから何かが生まれる。6年生のやってきた理科実験「虹の正体7色の不思議」が下級生たちにあらわされる。それに指導員のアドバイスが加わり、試してみよう、発展させてみようが生まれたら「学校で勉強することの意味」が見つかります。

私たちの場合、それが「おもしろサイエンス」「漢字はかせ」「算数はかせ」「社会科はかせ」「英語検定法」などに発展したのです。[放課後]はおまけではなく、1人歩きを始めたのです。まったく違った視点からモノを見る。そしてやる。それは子どもたちをワクワクさせ、ある行動力、観察力、洞察力、持続力をつくり出します。あしたの学校での勉強に期待感を持って臨めます。あしたに期待する子どもが生まれます。

### 阿部 進 (あべ すずむ/通称‘カバゴン’)

1930年東京生まれ。19歳でひょんなことから川崎市の小学校で代用教員。そのまま居ついて15年。61年『現代子ども気質』、62年に『現代っ子採点法』を出版。その後「現代っ子」が一人歩きをする。65年退職。手塚治虫、寺山修司らと「現代子どもセンター」を創り新教育運動を提唱。野生学園・麻布科学実験教室、劇団はかせ主宰。現在は、全国子ども居場所問題協議会会長や横浜市子ども支援協議会会長を務めながら、広く「放課後」独自プランの普及に尽力している。

## 8. そこで指導者は何をするか

指導者のすることは決まってきます。

### ◎「おもしろいことを発見すること」

何がつまらなくて、何がおもしろいかを指導者が、まず自分自身で発見することです。おもしろいと思うことを見つける、やってみる→子どもに見せる、やってみせる、やらせてみる。

### ◎「レパートリーを増やすこと」

手持ちのやってみせたり、語ったりする内容を充実させ、その数を増やすことです。これは、あちこちにアンテナを張っていないとできません。

### ◎「お金がかかります、手間がいります」

無償ボランティアに頼るという時代は終わりました。人の善意、好意だけでは長続きしません。専門的な知識や技術のある方に参加してもらうか、助言してもらうか。それには、お金がかかるのです。改めて「お金」の必要性が再認識されるべきで、これなくては[放課後]のこれからはありません。市民活動側、行政側の2つの接点から、この「お金」をつくり出す、これが今後の課題です。



# 指導員に向けた「創作あそび」放課後活動へのアドバイス

竹井 史

放課後活動においてもものづくりのをしようとするとき、指導する側において、少なくとも題材の選択、予算と材料面、時間、製作環境、道具・安全面、子供の発達、支援のあり方の7点に関する配慮を持つことが必要です。以下では、その点に関して要点をまとめてみたいと思います。

## ①題材の選択

どのような題材を選択するかは放課後活動の成否を握る重要な観点です。指導員は製作時間や発達などに配慮し、適切な題材を選ぶことが必要になってきます。後半で、全体の時間の中で使う製作時間は全体の半分程度と述べていますが、必要に応じて、5分、10分程度の製作時間で出来るショート題材と組み合わせていくと進度の違いを調整しやすくなります。材料については工作用紙や色紙、紙コップ、ストロー、割り箸などの身近で安価な材料または、紙パックやペットボトルなどの廃材を使って出来る題材がお勧めです。

## ②予算面と材料について

放課後活動でもものづくりをしようと言った場合、気になるのが、予算面でしょう。少ない予算の中で活動の質を落とすことなくいかに創作活動を成立させるかということがこの領域の最も重要なポイントになると思われます。このように考えますと、まず考えられるのが、使用材料に身近な材料や廃材を活かすということでしょう。

教室の一角に廃材箱を作り、日常的に出た廃材を収集しておくとういわれます。具体的に使いやすい材料としては、紙パック、ペットボトル、包装

紙、新聞紙は集めておくとかと使い勝手がいい材料です。

## ③時間について

ものづくりの要素を活動の中に入れるとき、タイムスケジュールの設計が成否の鍵をにぎる一つです。よく見かけられるのは、製作だからということで、作ることにほとんどの時間を強いられ、作って終わり、というケースが多いのも事実です。これでは、せっかくの製作もその値打ちを十分活かさないといわざるを得ません。創作遊びというからには作って終わりではなく、作ったもので遊べ、友達同士のコミュニケーションを図る、クラスを飾ることが出来るなどの要素が必要です。全体の活動時間を1時間とした場合、少なくともその半分の30分は遊び活動に時間を使うことが必要でしょう。その日にもし遊べなければ、期待感を持たせて、次回につなぐことが必要です。

## ④製作環境について

地域にもよりますが、一般的に放課後活動のスペースは限られたところが多く、十分に製作のためのスペースを取れないことが多いと思われます。一つのアイデアとしては、製作時にカッターマットや粘土板などを用意し、一人の製作スペースを制限し、そのスペース上で作業を進めるようにするとよいと思います。大がかりな作業を伴うものになりますと、教室の一角にビニールテープなどで作業空間を囲み、作業をする子供と指導員のみがその中に入れるようにすることも必要です。

## ⑤道具・安全面

上述しましたように、限られたスペースに多くの子供たちが活動をすると、気になるのが安全面です。特に製作のための道具類が思わぬ事故を生むことになりかねません。製作の道具として一般的なものははさみですが、はさみは先の丸まったもの、出来ればフッ素加工のされているものが結果として、作業の効率や準備の手間を省いてくれます。また、道具の使用にあたっては、道具の置き場所をルール化し、使った道具は必ず所定の場所に戻すという習慣作りが必要です。たとえば、はさみですと、布ガムテープなどで補強した紙パックの片面に6～8コくらいの穴を開けておき、そこに使用したはさみを収納するというようにすれば、不用意な事故は防ぐことが出来ます。また、セロハンテープや接着剤に関しても、それを使う場所を決め、その場から持ち出さないルールを決めておくとうよいと思います。

## ⑥子どもの発達

小学校の6年間は子どもの成長において大きな違いを見せる6年間です。手先の巧緻性やイメージ力においても大きな差異を見せます。少なくとも小学校低学年、中学年、高学年の発達面における特徴を把握し、指導に当たる必要があります。小学校低学年は、作っている途中で作ろうとするもののイメージが変化することが常で、素材の特徴を踏まえた製作に対する配慮にも乏しく、指導員の支援が前提となります。中学年でもその傾向は残りますが、小集団で話し合ったり、協力し合いながら製作を進めていく力がついてきていますので、指導員としては状

況にふさわしい小集団をつくることに配慮し、集団では達成できない内容について支援のポイントを見出すことが必要です。高学年になれば、作業以外にその場でのリーダー的な働きを期待することで、たとえば低学年にあわせた簡単な作業も新鮮な気持ちで取り組むことが可能になります。

## ⑦支援のあり方

製作指導の場合、指導員が子どもたちの前で作業の仕方を説明していくことが通常ですがその際にも、子どもたちに理解しやすい説明をすることが必要です。たとえば、作業の説明に対しては1度だけの説明ではなしに、少なくとも最初に戻って2～3回説明を繰り返す、それでもわからなければ、本人の目の前で一緒にやってみる(その際、異年齢の集団を活かし、上級生をリーダー的に位置づけ、教えるスタイルを繰り返し、習慣化することで、日常的な人手不足を解消する手立ての一つになります)、ことは必要なことです。また、説明に当たっては大人が一言でいう言葉の中に複数の動作が隠されている場合、その作業を分解し、段階的に説明することが必要です。一つの言葉の中に一つの動作を対応させた説明をこころがけることが必要です。道具類を使用した説明をする際には、その作業が見えやすくする工夫も必要です。たとえば、小さなものの作業には、補足の説明プリントをつけたり、実際よりも大きなもので説明したり、セロハンテープを使用して説明する場合でも、透明のセロハンテープではなしに、色つきのビニールテープを使用して、後ろにいる子どもからも見えるようにする配慮などです。

### 竹井 史 (たけい ひとし)

大阪生まれ。林竹二、灰谷健次郎に影響を受け、大学時代を沖縄にて過ごす。神戸大学大学院教育学研究科修了。富山大学人間発達科学部教授を経て、現在、愛知教育大学准教授。大学では、保育士、教員養成を行う。社会的な活動として、約15年間、富山大学親子フェスティバルなどの「ものづくり」体験イベントを実施。これまで7万人以上の親子とかわる。自然物や身近な材料を使った伝承おもちゃ、おもしろおもちゃなどを核とした「ものづくり」による人間教育を目指している。

# 指導員へむけた「音あそび」放課後活動への提言

柴田 礼子

みなさん、「音あそび」と聞いて、何をイメージするでしょうか？何故、「音楽あそび」ではなく、「音あそび」なのでしょう。「音」というと、声など、自分の体から出す音など、生活にも密着している音をはじめ、雑音、騒音、効果音、楽音など、様々な音が挙げられます。

本来「音楽」も、語源的には、音を楽しむと書くのですから、音が基本にあります。音と戯れ、音を聴き、音を仲間と共有し、音を自ら作り出すことが、音遊びであり、音楽である筈です。ですが、多くの方は、「音楽」と聞いた途端、出来上がった既成のものとして捉えたり、専門性が高いものとして捉えることが多いように思います。最近では、授業の中で行う音楽も、創造的音楽学習の方向性がかなり浸透しているとはいえ、そこでは、音楽は教わるものであり、習得する技術であり、評価されるものです。それが、「音あそび」と「音楽科授業」との最大の違いです。

ドイツ語に、spielen (シュピーレン) という言葉がありますが、これは、英語の play と同義語で、遊ぶことと演奏することの両方の意味を持ちます。「音あそび」では、まさにその spielen の考え方が必要です。音への興味、いろいろな音の体験、新しい音の発見、音で遊ぶ喜び、音によるコミュニケーションなど、その「音あそび」で得られる要素は、多岐に渡ります。それが、決まった課題をこなすだけの音楽の授業になった途端、本来、音楽で得られる筈の要素が失われてしまうことは少なくありません。それは、時間的な制約や、評価を与えないといけない科目としての課題点もあり、簡単に解決できることではありません。でも、だからこそ、今、新たな枠組みとしての放課後プログラムの必要性が急速に浮上してきていると言えるのだと思います。

本来、芸術という分野に、○×はありません。何が良くて、何が悪いのかなんてことは決めることはできません。また、一齐に同じ回答を求められるものでもありません。むしろ、逆に、どこまで人と違うことができるか、いかにオリジナリティを出せるかが、大事なことになってきます。そういう枠組みで、音楽や音というものを捉え直した時に、必要なのは時間です。子ども達が、ああでもない、こうでもないと言いながら、自ら作っては壊し、試していく試行錯誤の時間です。その試行錯誤の時間こそ、芸術分野では、保障されるべき大事な事だと思います。そしてまた、

それを一緒に行う仲間や、その姿勢や方向性を認めてくれる大人の存在も、非常に大事になってきます。ある子どもが、音の仕組みに興味を持ったら、それを一緒に調べたり、ある子どもが、新しい音を発見したら、それを一緒に喜んで、すごいと褒めてくれる異年齢の仲間や大人の存在は、非常に重要です。

子ども達がそういう仲間と、音に出会い、音を楽しみ、音を通して他の世界を知り、音を仲間と共有していかれる活動は、放課後教室だからできることと言っても過言ではありません。そうやって、子ども達が成長過程で、「音あそび」を通して「承認」される経験をたくさん持つていくことは、子どもが生きていくための大きな力になっていくと思います。それらの活動をするのに、特定の技能や音楽的知識は必要ありません。場合によっては、そういう専門性は、邪魔にさえなるくらいです。必要なのは、音を媒介にして、子ども達と一緒に遊び、楽しみ、学び、作り、共有していく気持ちだけです。

是非、全教室で、横断的に様々な音探しや、音作り、音あそびを一緒に楽しんで下さい。

### 柴田 礼子 (しばた れいこ)

富山大学非常勤講師。NPO法人日本エデュテイメントカレッジ理事。日本オルフ音楽教育研究会運営委員。国際オルフシュールベルク奨励促進協会会員。日本幼児音楽教育研究会会員。東邦音楽大学ピアノ科を卒業後、渡欧。オーストリア国立音楽芸術大学モーツアルテウム「カール・オルフ研究所」で“音楽と動きの教育”を学び、A-Studium 及び B-Studium を卒業。ドイツ学術交換局奨学生として、ザルツブルグ市民大学子どもクラスで“音楽と動きの教育”の指導にあたる。現在、さいたま市で“音楽と動きの教室”シュピールハウス”を主宰し、1人ひとりの表現を引き出す音楽教育を展開。また、障がいのある子どもたちとの音楽活動や、その指導者の養成も行う。著書に「ピアノとあそぼう」(音楽之友社)など。

# 「食育」の視点から見た放課後活動への提言

相澤 菜穂子

食育基本法ができて4年ほど経ち、小学校での食育の取り組みは全国で広がりを見せています。そして、今年の春からは新しい学校給食法が施行されることになり、食育としての給食の役割が大きくなり、地元食材や郷土食を取り入れた地産地消型の給食がますます活発になってくると思われます。その中で、放課後活動においても食育の実践が行われることは子どもにとって大変有意義で、楽しい時間を過ごすこととなります。

幼児から学童期にかけての子どもたちは、食への興味は旺盛で、料理をすることにも強い関心を示し、実際に調理すると大人が思っている以上に調理能力が備わっています。自分の五感を使って行うことは記憶に残り、身につき、そして満足感や達成感を味わうことができるということをまず指導者側が理解することが大切です。私の行っている食育料理教室では、子どもたちが料理を行う時は、手の洗い方、包丁の使い方、火のつけ方、消し方、そして、してはいけないことを子どもたちと実際に確認し合ってから始めます。そして、子どもに無理のない環境づくりやスムーズな進行に配慮しながら、子どもが主体になって行うことを心がけています。

これから食育プログラムを進めるにあたっては、指導員の方はあらかじめ手順を覚え、ゆとりのある時間配分で進め、子どもへの指導ポイントをおさえながら冷静に対応できることが大事で指導員の方が準備不足であわてふためくことがないようにしたいものです。

子どもにとって料理や実験の失敗はそれもまた学びとなり、失敗を挽回できる方法も考えたりすると、工夫や知恵を知ることができるので、ますます楽しくなるでしょう。食育実践の中では子どもの生きる力や魅力ある個性を発見する機会が多くあり、年齢よりも経験の違いができるかできないかの差になります。卵を割ることができなかった6年生もいれば、包丁で野菜を上手に切る1年生もいます。子どもがやってみたいという気持ちに勝るものはありません。指導するにあたっては、それらを敏感に感じ取り、安全にできるようにサポートする技量が必要になってきます。それには食が好きで、料理も好きであることにこしたことはありません。

そして、何を行うかを考える時、季節の行事から取り上げるのがよいと思います。それらには古くから続く知恵があり、地域性が反映され、生活に密着して行えるからです。お正月におせち料理やお雑煮を食べなくなったなど、現在は家庭でそのような行事を行わなくなる傾向ですが、日本の食文化を知る上ではこのような行事をもう一度取り戻し、子どもたちに伝える機会が増えることは、食育として大切な役割と考えます。

今回の食育プログラム作成では、日本食と保存の知恵を中心に作成し、子どものおやつにもなるような料理を作成しました。出来上がったものはどんな味でも、どんな形でも、自分が作ったものに愛着を持って子どもたちは食べるでしょう。体験することで着実に子どもたちの自信と意欲は高まります。子どもたちの心と体の健康作りになる食育をぜひ取り入れて、放課後活動の活性化につなげていかれることを願っております。

#### **相澤 菜穂子（あいざわ なほこ）**

食育料理教室あいね主宰／食育料理研究家・管理栄養士。食品メーカーでの勤務後、フリーとなり、食と健康をテーマに日本人に合った食生活を提案している。子ども対象の食育料理教室を開催するほか、食育に関連した企業、NPOなどのイベント企画や飲食チェーンなどのメニュー開発を行っている。

# 健全な子どもの身体～放課後児童の発育を現場から発信～

渡辺 美佐子

## 子どものからだの変化

近年の子どもたちの体格が良くなっている。体格の統計を見ても、身長伸び率、体重伸び率とも上昇している。生活スタイルや食生活の変化からも、子どもの体格の違いをうかがうことができる。子どもの頃は、摂取した栄養素が大人とは違い、からだの発育に関係するところに栄養が吸収される。例えば、幼児期では、脳や体が発育する。そのため栄養素は、まず脳に、そして筋肉、骨にと吸収されるのである。児童虐待でネグレクト（育児放棄）されて育った子どもは、からだの発育が遅れていても、知的レベルは正常である場合がある。

また、最近の子どもたちにもメタボリックシンドローム傾向がみられる。以前は、成人特有の症状が現れるために「成人病」と呼ばれていた疾患が、子どもたちにも現れるようになって「生活習慣病」と呼ばれるようになっている。

## 東京オリンピックから スポーツテストが行われている日本

日本では1964年の東京オリンピックの年から「体力と運動能力についての全国調査」が実施されており、40年以上前からの子どもの体力に関するデータがある。このデータから比較すると、最近の子どもの体力は、低下していると言われているが、正木健雄氏（日本体育大学名誉教授、子どものからだと心・連絡会議議長）によると、「全国調査の結果から、学校体育の取り組みが行われているため、決して体力は低下していない。低下しているのは、背筋力と柔

軟性である。」と言っている。

人間は2本足歩行の動物である。重力を受けながら体を足で支えて生活している。そのからだを支えるために、最も必要な背筋力が低下しているのである。また柔軟性においても、今まではからだを十分に動かすことで発達してきたが、次第にからだを使う遊びから、テレビゲームやビデオ等の室内遊びが多くなったために、低下したものと考えられる。いろいろな遊びは地域で育ち、伝承遊びとなって伝え遊ばれてきた。しかし、今では、テレビゲームのように、全国共通のマニュアル的なあそびへと変化している。

最近では、体育の家庭教師が人気を呼んでいる。今までは、子ども同士が外で遊ぶことによって自然と身につけてきたものが、そうではなくなったためと思われる。私の子どもの頃は、逆上がりができる子どもが、遊びの中でできない子どもを教えていたような気がする。

また、すぐ「疲れた」という子どもが多くなっている。（子どものからだと心白書 2000 より）身体的疲労というより、神経的疲労が多いのではないだろうか。身体活動で筋肉を使い、筋肉に乳酸が溜まっていく疲労ではなく、テレビゲームやストレスによって、脳がボーッと不活発になることによる疲労ではないかと考えられる。脳を活発に動かすためにも、全身を使って遊ぶことが最も効果的であろう。



## 足裏から見えるもの

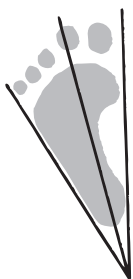
便利になってきた生活とは、からだを使わない生活と言い換えることができる。子どもたちの生活の変化も同様で、例えば、からだの動きや体温調整の機能よりも、おしゃれな洋服が好まれたり、交通の便利さから歩くことが少なくなったりする傾向など、子どもたちの身のまわりの様々な環境が、あるべき健全なからだの発育を阻害しているとも言える。

私たちの足には「土ふまず」がある。土ふまずが私たちの生活で何の役割を果たすのか、知らない子どもたちも多いと思う。大人もそうである。土ふまらずは、歩くために大切な役割を果たしており、かかと→外側→親指の順番に着地する。走る時も同じである。そして土ふまずのアーチが地面からの衝撃を吸収して、疲れないようにからだを守っているのである。遠足で歩いても疲れのないのは、この土ふまらずが働いているためである。

土ふまらずが未形成（イラスト B、C）な子どもは、全身を使うあそびが少ない子どもである。人間のからだを支える足裏をしっかりと使って、発達させてほしい。

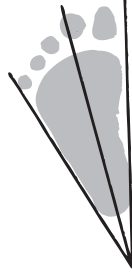
形成途上

B



形成されてない足

C



## 元気な子どもに育つために足裏を測定しよう！

子どもたちの元気度チェックのために足裏を測定しましょう。自分の足裏と友だちの足裏と比べたり、夏と冬で比べたりして、生活と足裏の関係を調べてみよう。

### 【測定時期】

1. 年間3回程度、実施する。
    - <5月> 年度始めからスタート
    - <9月> 夏休みの過ごし方がわかる
    - <3月> 一年間の生活を比べてみる
- 学童期（放課後児童1～3年生）を通して、測定を継続する。

### 【用具】

平らなバット（片足が入る大きさ）、絵の具、タオル、画用紙、イス、模造紙、新聞紙

### 【測定方法】

1. 椅子の正面に新聞紙を敷き、画用紙を置く。
2. 両サイドに絵の具の入ったバットとタオルを置く。
3. 子どもをイスに座らせ、両足に絵の具をつけ、静かに画用紙の上に足を置く。
4. 足が動かないように、静かに一回立ち座る。
5. 静かに両足を持ち上げて、後方の模造紙の上を歩いたら足裏の絵具を拭く。



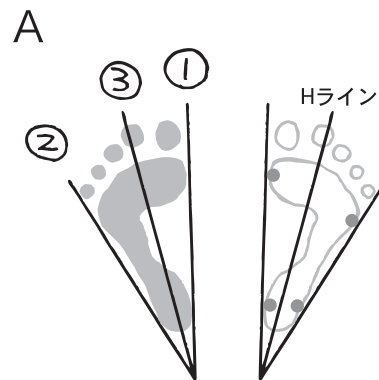


### 【計測】

1. 足裏が描かれた画用紙が乾いたら、イラスト A のように線を 3 本引く。

(①、②、③と順番に引く)

2. Hラインを見て、土ふまずの形成を観察する。  
(Hラインより、外側まで土ふまずが形成されていれば、「土ふまず」は完成)



## 元気な子どもの遊び

児童期は、スキャモンの「発育曲線」から見ると、筋力、瞬発力、筋持久力が育つ時期である。短い時間でもよいから、子どもたちが全身を使って、力を出し切るあそびを取り入れることが重要である。鬼ごっこや綱引きのように、短時間で楽しく遊べるあそびを、1週間に数回取り入れてみるだけでも効果が上がると思われる。からだを支える背筋力や、しなやかな体づくりのためにも、これらのあそびが効果的である。

21世紀を担う子どもたちが元気に育つためには、子ども時代のあそびが大切である。

子どもたち自身のからだを、自ら支えるためのからだづくりである。元来、子どもたち同士のアそびによって培われてきたからだの発育が、生活や環境等の変化で損なわれてきていると考えられる。そのような状況のなかで、子どもたちからだを楽しく動かすあそびを提供していくことがとても重要となる。子どもたちが集まる放課後活動の場において、あそび感覚でできる「足裏測定」によって、あそびの重要性を再認識することができると考えている。

### 渡辺 美佐子 (わたなべ みさこ)

(財)健康・生きがい開発財団 主任研究員。千葉障害者スポーツ指導者協議会 副会長。日本ボッチャ協会 常務理事。主な著書に、みんなで楽しむ!障害者スポーツ全5巻 4巻ユニバーサルスポーツ&アイデア集(学研)レクリエーションスポーツプログラム指導者ガイドがある。

## おわりに

放課後活動の「場」は、主人公である子どもたち（放課後児童）にとって、まず‘極楽境地’でなくてはならないと考えられます。私たちが、幼少のころを思い出すと、とても楽しかった‘原風景’が、鮮明によみがえってきます。次代を担う今の子どもたちには、このような‘シーン’が描かれるのでしょうか。一人の親として、次代を委ねる人として、とても心配になってきます。

放課後活動の「場」は、従来からの学童保育においても、就労する保護者にとっては、とても大切な「場」となっています。少子高齢化や両立支援等の問題のほか、安全・安心の場としても、「子どもの居場所づくり」の課題は、今では避けては通れないものとなってしまいました。しかし、こう言う時代だからこそ、今一度、放課後活動の「場」を通して、子どもと家庭、子どもたち（放課後児童）と学校や地域との方々が、互いに向かい合い、豊かな人間関係と良好な社会環境を取り戻さなければなりません。その際、あくまでも‘子どもの目線’に立って、放課後活動の「場」の在り方を考えて行かなければならないと思います。

そのような‘想い’で、私たちは放課後活動の現場に足を踏み入れ、「放課後活動支援 i - ku サポートプログラム」の試行～検証を行いました。

今回、この事業にご協力頂きました、東京都港区、千葉県四街道市、石川県小松市、並びに、(社)京都市児童館学童連盟、そして、取材や視察等に応じて頂きました、横浜市、さいたま市をはじめとする各市区町村の方々に、厚く御礼を申し上げますとともに、今後の「放課後活動」の実施に当たりまして、次代を担う子どもたちのために、より一層のご支援・ご尽力をお願いしたいと思います。

NPO法人 キッズエクスプレス 21 実行委員会

## 寄稿者名・講師名

相澤 菜穂子（あいざわ なほこ）	食育料理教室あいね 主宰、管理栄養士
阿部 進（あべ すすむ）	児童教育家（通称：カバゴン先生） 全国子ども居場所放課後教室問題協議会 会長 横浜子ども支援協議会 会長、横浜だがしや楽校 校長
柴田 礼子（しばた れいこ）	シュピールハウス主宰、富山大学 非常勤講師 NPO 法人日本エデュテイメントカレッジ 理事
竹井 史（たけい ひとし）	愛知教育大学教育学部創造科学系 准教授
田島 美帆（たじま みほ）	玉成保育専門学校 非常勤講師
直井 玲子（なおい れいこ）	東京家政大学家政学部児童学科 助手、保育士
山本省三（やまもと しょうぞう）	社団法人 日本児童文芸家協会 常任理事、絵本作家
渡辺 美佐子（わたなべ みさこ）	財団法人健康・生きがい開発財団 主任研究員 日本ボッチャ協会 常務理事

（50 音順、敬称略）

平成 20 年度 文部科学省「総合的な放課後対策推進のための調査研究」事業

放課後あそぼ！ **放課後活動プログラム集 2**

平成 21 年 3 月発行

発行人 竹井 純

編集・発行 NPO 法人キッズエクスプレス 21 実行委員会

KID'S EXPRESS 21

〒 104-0042 東京都中央区入船 3-2-7 第 2 明治ビル 6 階

TEL 03-3553-1935 FAX 03-3553-1922

<http://kids21.gr.jp/>

本誌は、平成 20 年度 文部科学省「総合的な放課後対策推進のための調査研究」事業に基づき作成されました。

無断複製・転載、デジタル化を禁じます。